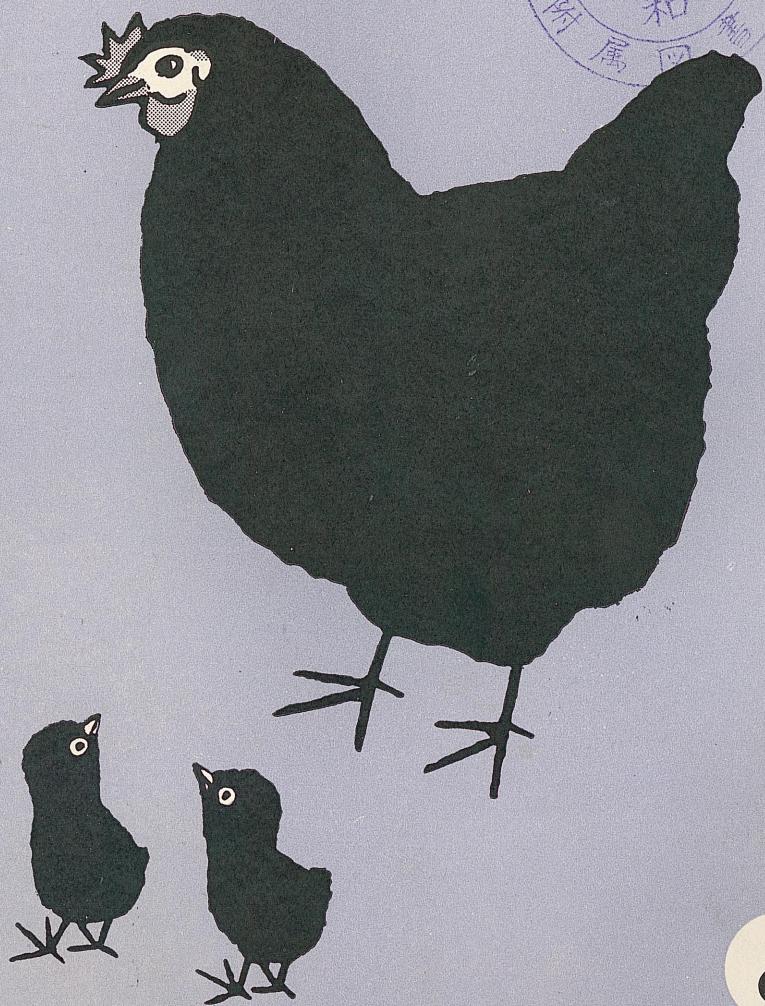


# 幼児の教育

第五十七卷 第



8

# 幼児のための紙芝居

お待たせしました……

みつち一・夏の巻 定価五百円

たのしい臨海学校でみな大よろこびですが、みつち一先生だけは汗だくです。海では象君の鼻にたこがついた  
おり、野原ではたぬき君が穴におっこちたりのおおさわぎ。

お山のなかよし（七月一日）

おじいさんのところへ毎晩遊びにくる可愛い男の子は、  
壁にかけてある狸の皮をじっとみつめては涙してます。

お月さまはだれのもの（七月一日）

わしたちがもつてきましたお月様はわしたちのだ……とい  
つて二人の男はお墓の中にお月様をもつて行きました。

さる太のやくそく（八月一日）

さる太から借りたかさをもつたうさちゃんは、くらくな  
つて来た道を、どんどんどんどん走りつけました。

大ちゃんとおまつり（八月一日）

おみこしわっしょい

はなやかだったきのうのおまつりを思い出しながら広場  
へやつて来た大ちゃんの目にになにがうつったでしょう？

東京・千駄ヶ谷四ノ七一四  
振替 東京二九八五五五  
電話(34) 三四〇〇

カタログ進呈

教 育 画 劇

## トッパンの お話をほん

王子

以下続刊

各九〇円

## トッパンの 人形えほん

☆ちびくろさんぽ  
☆へんぜるとぐれーてる

各一〇〇円

4~6才向に編集した有名童話  
の美しいえほん

☆いそっぷ ☆じやっくと豆の木  
☆うりこひめ ☆いそっぷえほん  
☆てんぐのたいこ ☆はくちょうの

トッパン

東京都中央区日本橋茅場町1の20

かわいい人形を舞台にのせ  
天然色写真で写して作つた  
人形えほん

☆あかずきん ☆じゃっくと豆の木  
☆びーたーと狼 ☆三四匹の熊

☆三四匹の小豚

☆小豚のたん生日

☆しらゆき姫

☆おやゆび姫

☆まつちうりの少女

☆ぶれーめんの音楽隊

☆ねむり姫

☆七匹のこやぎ

# 幼児の教育 目 次

—第五十七卷 八月号—

表 紙 安 泰

日本の幼児教育.....牛島義友(2)

## 環境と保育

幼児のための環境とデザイン.....林 健造(6)  
遊具・玩具のデザイン.....斎藤公子(12)

ある保育室のはなし.....大熊米子(18)  
園庭全体のしつらえ.....土屋真砂子(20)

保育室の色彩.....木村俊夫(22)

童謡ものがたり 幼年ニコピン.....葛原しげる(28)

ドーフ 粘土(四月号「製作のヒント」から).....宮崎洋子(32)

小学校のカリキュラム改正について.....武田一郎(37)

しつけるということ.....岩丸茂雄(40)

「うつば物語」童話化の試み(2).....本田和子(42)

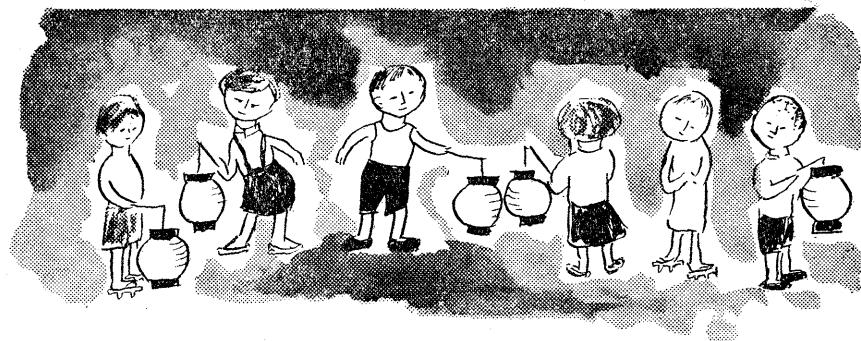
教育課程の実践的研究(2).....野村泰子 堂野晃子(48)

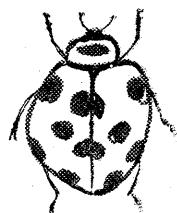
生活指導について.....秋田好枝(52)

東基吉翁のこと.....桜田守(55)

編集主幹 及川ふみ 編集主任 津守 真

協力委員 牛島義友 斎藤文雄 多田鉄雄 波多野完治 山下俊郎 (五十音順)





# 日本 の 幼 児 教 育

牛 島 義 友

日本の幼児教育と改つて論ずるほど私に世界的識見があるわけではない。しかしちょつとヨーロッパの幼児教育を覗いただけでも日本のそれと著しく違い、したがつて日本の幼児教育のことが何かと気になってくる。

ヨーロッパでは幼児教育はそれほど振わない。少なくも幼稚園から保育所へ変りつつあるという印象を受けた。イギリスについて言えば、幼年学校が出来たことによつて幼児教育の問題は一応解決してしまつたかのような気がする。すなはち向うでは満五才から幼年学校に行き、しかもそれが義務制となつてゐる。入学すると午前中はきちんととした基礎教科の学習をやり、午後は比較的自由な雰囲氣の中で製作、描画、積木、水遊び、音楽などを楽しんでゐる。午前は学校的であり、午後は幼稚園的で、生活指導や学習態度の訓練などもかなり進んでゐる。したがつて幼児に対する教育的指導の要求

は幼年学校に入ることによつて完全に満足されている。五才よりも年少の時代に対しても働く母親のためのナーサリー・スクールが数多く作られ、またよく利用されているが、その必要を感じない家庭では、教育のためにわざわざナーサリー・スクールにやろうとしている。日本の幼稚園のような教育のための保育ということはイギリスではほとんど問題にならないようである。

ドイツでも六才以下の幼児を対象とした幼稚園教育はそんなに盛んではない。働く母のための保育所はなかなか立派であり、乳児部も、また学童部も完備しているものが多い。これに反してフレーベルの精神をひいた幼稚園の教育といふのは振わず、またその経営はかなり困難のようにみえた。西ドイツの首都ボンで特に幼稚園を参觀したいと希望したのに對して、案内してくれた幼稚園はカトリックの女子修道院の

経営している幼稚園であった。この幼稚園は比較的よい家庭の子どもが集っているといわれたので、特にスケールの小さく悪い幼稚園ではないと思う。しかし建物からいと三階建ての僧院の一階にあり、玄関兼広間の部分と二つの保育室から成っているだけで、一つの保育室の広さは十二、三坪くらいのもので二人の保母さんが五十人ほどの子どもを保育していた。庭にも特に遊具があるわけではない、ただ僧院の庭が遊戯室になっている程度であった。だから幼児教育の条件は日本のそれに比べて一つもよいとはいえない。こここの年とった保母さんは長い経験をもつた元気な先生で、歌を歌う場合なども先生が少しかすれた声で歌い出すと子どもたちも元気に歌い出す。(ピアノなどは使わない)いかにもドイツ人らしい元氣に溢れた保育をしていたが、月給が安いといってこぼしていた。保育料が月僅か五マルクで、自分たちの給料も三〇〇マルクちょっとで、これではやつていけないし、ヒットラー時代の方がよかつたとかこつていてるような方であつた。これでみるとボンのような所でも家庭の親たちは幼児教育の必要を感じてもそれに必要な保育料を払い、設備を整えようという態度はみえず、わずか数マルクの保育料を払つているだけである。これでは安いとこぼす保母さんの給料を払

うだけでも並大抵のことではないと思つた。ここでは個人が幼稚園を経営していくといふことは不可能であり、まら成つて幼稚園でもうけるなどということは考えられない。

フランスのエコール・マテルネはなかなか立派なものではあつたが、やはり保育所的性格をもつて無料である。一方、同じ町にあつた幼稚園は有料であるが、比較にならずお粗末な建物である。子どもの数も少なく、とても経営はたいへんであろうと思われた。もつともエコール・マテルネは徹底的な教育をおこなう。年少の場合には感覚訓練、少し大きくなれば文字の学習や数の計算をやらせているので、幼児の教育が不振だとか不徹底だという意味では決してない。ただ幼稚園的な意味で子どもを通園させているのではなく、したがって在籍数は多いけれども、実際の出席数はお母さんの都合や天候などによつてかなり変動しているようであつた。

このような状態に比べれば日本の幼児教育、特に幼稚園教育は非常に盛んであり、まして経営もどうやら成り立つといふことはむしろ不思議な現象というべきではなかろうか。日本親たちが幼稚園のために高い保育料を喜んで負担していることだけでも実際に熱烈な教育的意欲の表れであるとみることができよう。日本人は子どもの教育のために金を出

すことはあまり好きではないらしい。義務教育となると少しばかりの P.T.A の負担だってなかなかうるさいし、大学の安い授業料だって滞納する学生が少くない。ところが幼稚園の保育に対しては親たちは苦しいなから実に多額の金を喜んで出している。この親の気持の中には近所のお子さんがどことこの幼稚園に通っているので、自分の子どもも負けずに通わしたいとか、子どもだけにはひけ目を感じさせたくないといったような気持もひそんでいるかもしれないが、とにかく子どもに育てようと必死になつている態度がよくわかる。ただ授業料だけの問題ではなく、送り迎えのこと、あるいは母の会などに熱心に出席することなど親の教育的熱意が幼稚園時代に一番強いと言いたいぐらいである。

しかしヨーロッパの親たちは子どもの教育に無関心なわけではないし、またおそらく金のかかるパブリック・スクールに子どもを通わしている家庭も少なくない。幼児を教育機関にあまりあずけようとしているのは家庭教育に強い自信を持つためである。イギリスでは家庭が生活の根拠であり、社会の不安から身を守る城であり、また何よりも楽しいスイート・ホームだと言っている。また事実、個人の家屋と幼年学校やナーサリー・スクールと比べた場合にそれほど大きな差は感じられない。住宅もどつしりとしているし、壁は厚いし、二階建て二戸で一つになつてあるブロックの大きさで決して小さくない。日本では住宅と校舎との間にあまりにも大きな差があり、どこに行つても学校はすぐ目につくが、イギリスでは学校がいつこうに目立たない。また家庭の中で親たちは子どもに強い教育的な態度で臨んでいる。特に母親のしつけは厳しい。幼児期においての子どもを甘やかさないし、特に人の見ている前で子どもを愛撫することはみつともないことだと感じているらしい。学童期になつても子どもに対する親の教育は厳しいし、また子どもは親に対しても常に素直である。教師たちもよい子になるか悪い子になるかは家庭の如何によつて決るといつていい。

ドイツでは小学校や中等学校は午前中で帰ってしまう。朝八時から続けざまに勉強し、昼食もとらずに一時頃帰校する。このような習慣に対して教師はドイツでは親たちがあまり長く子どもを学校に置きたがらない。子どもの教育は家庭でやりたいし、そのための時間をたくさんとりたいなどと答えていた。これだけが原因だとは思われないが、少なくも家庭での教育を重要視していることだけはじゅうぶんうなづけるであろう。フランスでは午前三時間の勉強がすむと家に帰

つてゆっくり食事をし、二時にまた出校して五時まで勉強する。この十二時から二時までというものは子どものみならず、父親も働くお母さんも兄弟もほとんど皆家に帰って家庭の食事を楽しむわけである。向うでは急いで食事をすることはよいことはされず、長い食事の間もいろいろと自分の経験を話し合いながら楽しむ。親たちも子どもが思っていることを何でも自由に話すように気を配っているということである。ある学長さんにいろいろ世話をなったので夕食を招待しようとしたところ自分は家庭で食事をしなければならないし、家庭生活が一番大切と思うのでその招待には応じられないと断られたことがある。

このようにヨーロッパでは家庭生活が充実され、家庭教育に対する期待と自信とが非常に強いのに驚いた。

日本の家庭は家族制度が非常に複雑で、家庭の圧力が強くのしかかっているといわれていた。たしかに昔の家庭にはこのような家族の圧力は強く、また家庭教育なども重要な位置を占めていたようである。ところが近代の特に都会生活者の家庭生活は激しく崩壊しつつあるようである。家庭教育に力を入れたり、一家揃って食事の時間を楽しむとか、家庭を憩いの場として安定感を持つというような点ははるかに少なく

なっているようである。家庭生活の崩壊のテンポは日本の方がよほど急速であり、ヨーロッパの生活の方がはるかに家庭生活的要素が強く残っている。

また日本は学校教育に対する依存の度合があまりに強い。教育を尊重するという点からみれば日本ほど長く子どもを学校にやろうとする国民はない。英独仏でも義務教育後に上級学校に就学するものは二〇パーセントに至らない。日本では四七パーセント以上進学している。大学の数の多いことはあまりにも有名である。しかしこの学校を尊重する反面に家庭教育に自信を失い、また家庭の教育が不完全である点はおおいに反省すべき点ではなかろうか。殊に幼児期は家庭教育がもつとも効果的にできる時代であるのでこの時代に親たちは自信をもつて家庭での教育に力を注ぐことが望ましい。それを補うためや援助するために幼稚園教育を受けるのは正しいことであるが、家庭教育に代るものとして幼稚園教育を期待したり、幼児の教育に自信がないので幼稚園にすがるといふようなことは正しくない。また幼児教育者もこの母親に対しては家庭教育に自信をつけてやり励ましてやることが大切だが、自信を失わすような指導をしたら大きな過ちをおかしたというべきであらう。

な角度から述べてみようということに過ぎない。

## 一、教師の役目

子どもの絵画製作を指導する教師の最も大切な仕事は、絵の描きかたや、製作の技法を教えることではなくて、子どもが、自由に、のびのびと、自分の創造力を發揮できるように励ましてやることと、もう一つは環境を整えてやることである。ということは、もう今日では進歩的な教師の誰もがなつ得し、おこなっていることであろう。

# 幼児のための 環境とデザイン

## 林 健 造

### 環境と保育

#### はじめに

幼児のための環境ということは、大上段にふりかぶった環境論をいうのではない。「環境は人をつくるが、人はまた環境をつくる。」ということはあるが、ここでいう環境は、むしろ後者のつくる環境、すなわち心的な部面ではなく、主に物的な環境構成といった部面について、ごく身近な問題の設計・計画をふくめたデザイン的

子どもたちを励ますことはさておき、環境を整えてやるということは、「言うは易く、おこなうは難し」のことば通り、いろいろなしに追われている教師にとってはなかなかの努力を必要とする。それに、時と金も必要である。しかし、私たちはそのことを言訳にしてはいけない。子どもたちの幸のことを真剣に考えていくならば、ごく平凡なことばではあるが、「やれば出来る」ものなのである。経済のことも、金をなるべくかけない、安く作る方法もある。子どもたちとの協力で、その辺のデパートなどではちょっと売つていられないすばらしいものを作れるのである。

最も大事なことは、子どもたちが何を欲求しているかとか、子どもたちにこのような刺戟を与えればもっと伸びようとか、子どもたちをよく見つめ、よく知っていることである。このような動機から

わきでる教師のアイデア（着想）がごく自然である。もちろん、それに教師自体のアイデアだけのこともあり、子どもたちからヒントを得ることもある。

「先生、私たちのお部屋にタナバタさんかざろうよ。」

というようなことから、室の中のタナバタ飾りの構成を考えたり、また、

「ボクたちのつくったおさかな、泳がせる海がほしいな。」

ということにこたえて、みんなの子どもの作品をひつかける針金や、金あみのアイデアとなるようなことは、それである。

## 二、環境構成の二つの面

造形的な環境構成とでもいう面には大きく分けて次の二つの面が考えられる。一つは、園の設計・施設といった大きなもの、

例えば建築プランからしてそうである。どこに、どんな室をつくるか、運動場、池、砂場、保育室の壁、机、腰掛、黒板、手洗い、衣帽室や傘立てなどといった面であり、もう一つは、そんなに大きなものでなく、いわゆるふんいきづくりのための季節ごとの飾りのこどや、毎日の保育指導のために使う道具や設備のような直接的なもの、例えばみんなで使うための絵の具箱をどうするかというような面である。

前者の大きな面も、そんな大きなものは仕方がないなどと考えず

に、一つ自分が設計者になつたつもりで考えてみることも楽しいことをあり、えてしてそのような夢からすばらしいアイデアも浮かびでるものである。案外、実際には子どもはおとなのかいものという考え方から、何でも小さいものであればいいという考え方があるのではないか。

デザインは、ものの働き（機能）と美の両面を満足させるように計画されるものであるが、以上のようないろいろな設備も同様で、子どもたちの安全教育や、衛生の面や、教育的能率の面や、加えて美的な面と総合的に科学的に考えられなければならない。

しかしこのようなことを書くことはこの誌面では無理である。したがって、二、三の話題を提起することにとどめよう。

### A、色彩調節

近頃は、病院、工場、学校などで、さかんに色彩調節ということが問題化している。私たちの生活と色彩は非常に密接な関係をもつていて、色の加減で寒々とした感じや暖かい感じがしたり、沈うつになつたりすることがある。したがって生活環境をよくするために、色彩のもつてゐる働きを利用し、その効果を上げることを色彩調節、普通カラ・コンなどと呼ばれている。

特別に配慮されている園や学校をのぞけば、多くの場合教室や保育室は豪華である。神経質ないらいらした子、意欲のない、集中性

のない子、欠席がちの子、喧騒とけがなどは、色を調節した環境が与えられることによって相当救われることであろう。

豊島の学芸大付属小学校では校内の壁や廊下の色彩調節をした結果、子どもたちは落つき、綺麗好きになり、廊下をかけることはなくなり、騒がしさがへったという報告を発表していることも、このことを裏付けしている。

色彩専門家は次のようなことをいっているが、参考に挙げておこう。

○白と黒のコントラスト（対照）は眼を極端に疲労させる。白い紙から黒板に眼をうつすと眼を害する。また白い紙から白壁へ眼を移すときはまばゆさを感じ、苦痛はへらない。特殊な明るい中間色だけが眼を心地よく休ませる。（黒板や白い壁が眼を疲れさせるために、緑系統の黒板？を使うとか、壁も中間色でぬる、などが考えられる。）

学習に専念する室はどうちらかというと冷たい中間色がよく、活動を刺戟するような室は温い色、赤系統やオレンジの中間色がよい。北側からだけ採光する室は青はよくな。是非青にするためには黄を加え、緑にする。反対に太陽の光の直接入る室は、赤に青を加えた紫系統の明るい中間色がよいということになる。

## B、子どもの家

この頃、幼稚園などで子どもの家（室）を作っているところが多い。これは、子どもの寸法に合わせたおとな家の縮尺建築をし、家具、調度も縮尺ものである。みるからにかわいいが、おとな的生活のまねではなく、子ども自体の生活をうまくいかした建築設計があると思われるが、この期待はまだかなえられない。

ただ金沢大学の家庭科の実験の為に作られた保育室のタタミが全部半畳にきつてあり、汚しや破損の多い子ども室のタタミがえが簡単にできるよう、また一人でもあげ易いように工夫されていることと、掃除の時にゴミがすぐはき出せるように、はき出し口が大きく切つてある室をみたことがあるが、これなどは子どもの室のグット・デザインといえよう。

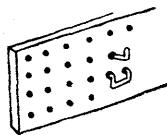
### 三、環境づくり

#### 設備のアイデア

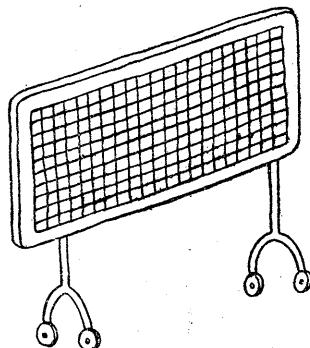
保育活動を活潑に、能率的にするために、教師はいろいろと施設や備品について工夫することが大切である。

ここにあげる例は、すでにどこかの園では、前から使われ、あるいはもつとよいものもあるかもしねが大方の参考のために掲げたものである。

パンチングボードでもよい

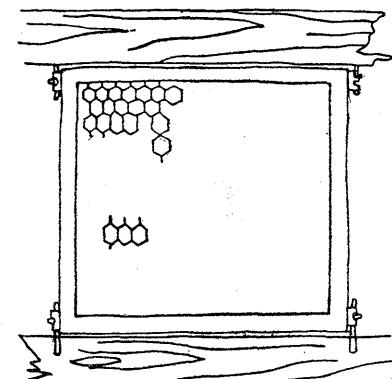


お茶大附属幼稚園に  
ある金あみの掲示板

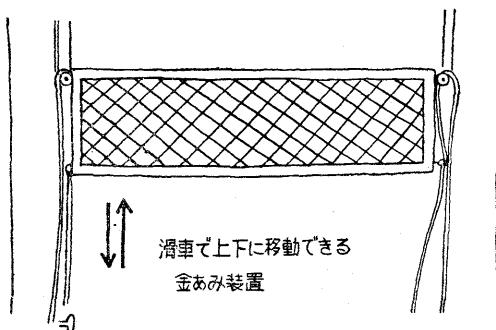


とりはずしのできる柱間にとりつけた金あみ

装置



①



滑車で上下に移動できる  
金あみ装置

### a、金あみと掲示 (ひっかける工夫)

金あみを通すとものが  
きれいに見えるし、何  
でもひっかけることがで  
きて便利なものである。

同様に最近、お勝手など  
につかわれているパンチ  
ングボード(たくさん穴  
のあいている板)も便利  
で、しかもいろいろと着  
色されたものが売ってい  
るので、環境のアクセセン  
トとしても美しい。

(図①)

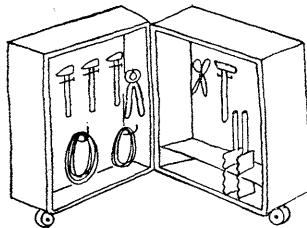
### b、カーテンレール

と戸車(動く工夫)

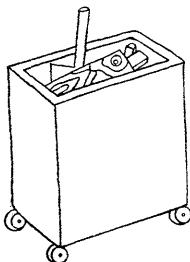
教師にとって掲示物が  
移動できるということは  
便利である。子どもにと  
つても動くということは

## 戸車とカーテンレール

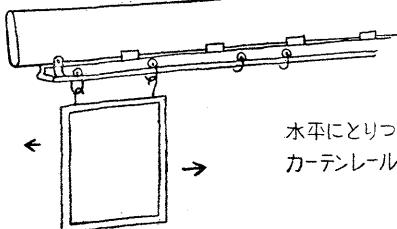
ふたのあく移動式道具箱



戸車のついた移動式材料箱

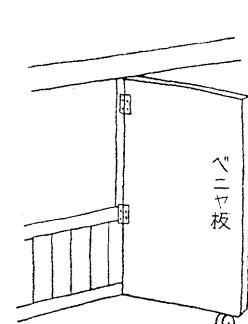


水平にとりつけた  
カーテンレール



ペニヤ板

室のうしろにとりつけた うごく  
掲示板



黒板に装置したカーテンレール  
(上げ下げできる掲示物)

②

すばらしく楽しい。カーテンレールや戸車（ゴムのついたもの、輪が自由に動くもの、大小などいろいろの種類がある。）

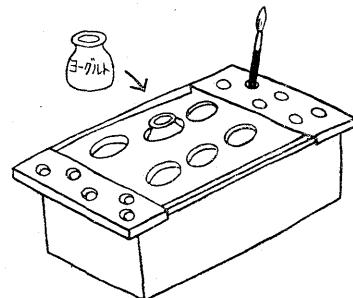
c、みんなで使う道具

両面から使えるダブル画架もよく使われているが、六尺ものを使うため片づけるときに困ることがある。これは三尺巾のものにして、分解できるように考えると便利である。（図③）

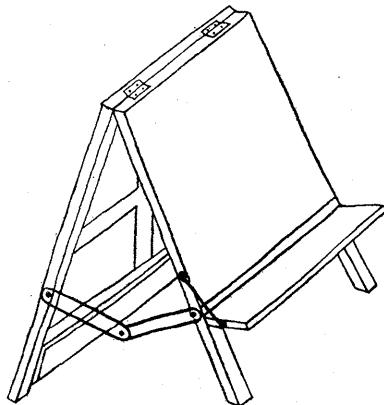
環境づくりには、このような設備ではなく、子どもたちの手によるおがりというようなものがある。みんなで新聞紙を

（図②）

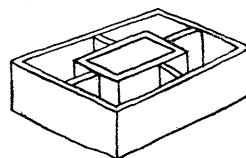
### 共同の絵の具箱



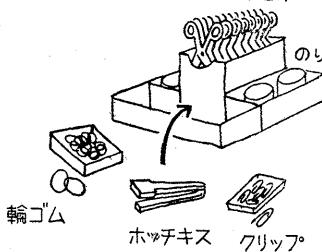
分解できるように工夫した  
ダブル画架



はりえのための材料の分類箱



はさみ



③

子どもの創造力をかりたて、ふるいおこすための環境づくりは、教師の子どもへの愛情からほとばしりでるすばらしいアイデアによってうみだされ、いかざれるものであるといえよう。

つなぎあわせて、大きな鯉のぼりを作って、壁にはって、五月のよろこびかなを作つて、みんなで味わうとか、海のおさかなを作つて、みんなでもちより、金あみにさげて、夏の季節をたのしむとかということはそれである。このことは、誌面を改めて述べることにしよう。

# 遊具・玩具の デザイン

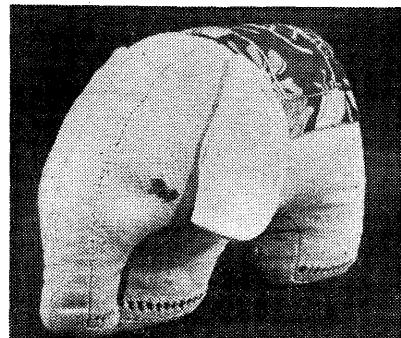
子公藤齋

環境と保育

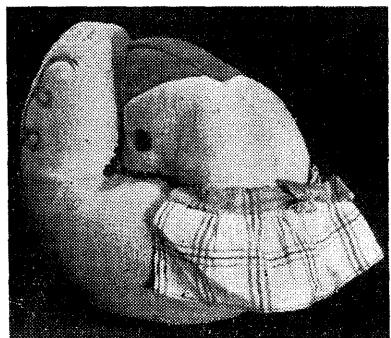
第一次世界大戦の直後に生れ、その後しばらくつづいた平和に、いろいろな意味の豊かさの中で幼児期をおえた者たちでした。それぞれ希望を持つてはいった学校を卒業するとまもなく、あの大東亜戦争で、あるいは特攻隊にえらばれ、すんでのこと前に前途を失うところであつた者もあり、長い飢餓の戦線からやつとかえつて来られたものもあり、さまざま生死の境を越えてかえってきたのに、今故郷の土をふむとすぐに、戦争の痛手は直ぐに忘れてしまつて、子どもたちに美しいものを、と自分たちの生活のこともあとにするのは、やはり幸福な幼児期のせいであつたろうか、と私には思われます。

ちょうどこの頃、保育の専門の勉強をしても、先生がこわくてなれず、自分の仕事をもきめかねていた私は、父が工芸家であったために、この人たちを知りました。そして“子どもたちに良い遊具を、良い玩具”をいうこの人たちの仲にとびこむことになったのがそもそもその始まりで、ただ玩具を創造するだけではあきたらず、実際に私や仲間のつくつた遊具、玩具を、子どもたちに生かして使わせたいと考えるようになり、あんなに恐れていた先生にとうとうなつてしましました。しかし、未だに幼い子どもを教える立場であることのむずかしさ、おそろしさに、いつそやめてしまおうかと何回考るかわからないことですが、ちょうどこんな良い機会を与えられましたので、多くのかたがたから御批判をいただくことが出来たらと、勇気を出して筆をとることにしました。

①



②



今からみれば大分昔の本ですが)

例えば、ドイツのものは形ががっかりと、角ばっていて、いかにも力強く、色は茶褐色系が多く、フランスのものは優雅な線で、色は淡いブルー、ピンクなどが多く、アメリカのものはいかにもユーモラスで、色も黄、黒、赤にぎやかであり、チェコのものはドイツと感じが似ていてもどことなく民芸的な香り高さを感じる、といった具合なのです。私はだんだんにおもしろくなつてゆきました。

玩具におおのの民族の特性が出ている。そうだ、その民族のねがいもまたこめられているのだな、と私は感じたのです。

いい玩具というのは、今の世の中のように、玩具屋がただ、うりたい、うりたいと一心に作つて、たくさん売れるからいいというのではなく、おとなが次の時代を背負う幼い子どもに、自分たちの、こんなおとなに育つてほしいという願いや愛情をこめて作るものなのだ、ということが何となくわかつってきたのです。幼い者たちは無心に玩具で遊んでいるうちに、知らず知らずのうちにおとなとの愛情と希望がしみこんで育つてゆくのだ、と思った時、私は新らしい玩具を作ろう、というものすごい意欲がわいてきました。

さて、私は玩具の仲間ではただ一人の女性であつた関係から、布の玩具の研究を受けもつことになりました。他の男性は各自、木、紙、金属など受けもちました。

最も単純で最も完全な“美しい形”は円ではないかしらと考えた私は、子どもの好きな動物を円でデザインしてみようと思ひ立ち、

ねてもさめても、道を歩いていても、空に円をえがいて考えつづけていました。フッと出来上ったのが、写真①の象です。

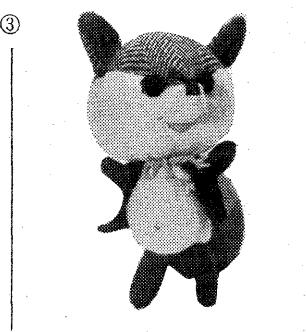
そして形からばかりでなく、質感からも強さ、豊かさ、美しさを子どもたちに感じさせたいと考えましたが、当時は布地などどこにも売ってはいませんでした。やむを得ず、麻のテーブル掛けをぎってしまいました。背中の布は手描きの蠟けつ染です。中につめたものは綿も買えず、もみがらでした。

つづいて写真②のにわとりのお母さんをつくりました。写真にはありませんが、後のひよこをふりかえっているところです。

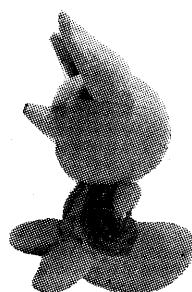
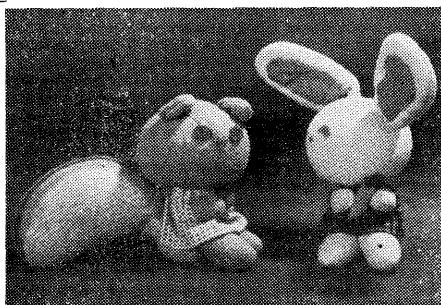
大きさはいずれも子どもたちが両手で抱えられるほどの大いさです。うまのりにもなる強さが必要です。

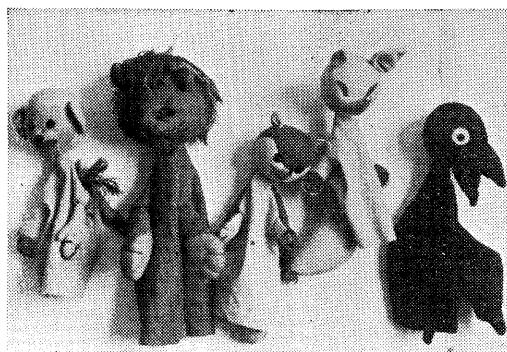
次に子どもたちの遊びを見てゆくうちに、子どもたちは動物たちをすっかり自分たちと同じ人間にあつかっているのをつて、作ってみたのが写真③④のうさぎ、りす、たぬき、きつね、ねこ、ぞう、くまの類です。これも質感を大切にして全部、厚地のウール地でつくりました。この頃もまだ布地は店ではもとめられず、洋裁店をまわつてあるいて、残り布をまとめてもらつてきて、その中からつかわれるものだけわずかえらび出して作りました。

これらの中でくまは、首や、手足を自由に動かせるようによつてみました。長い子どものはげしい使用にたえないと知つて、次につくつてみたのが、写真⑤のきつね、たぬき、らいおん、さるの人形芝居の出来る動物たちでした。これも大きさは子どもが全身で

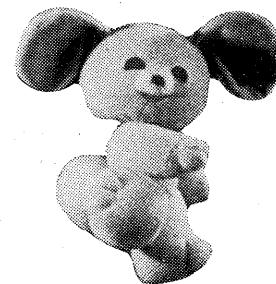


③





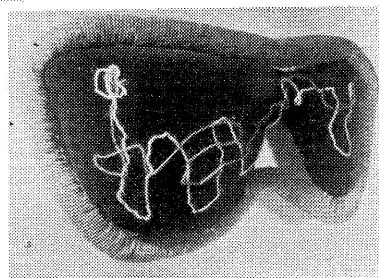
⑤



④



⑥

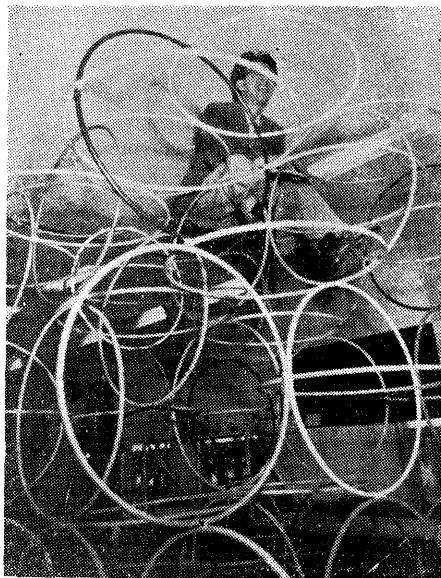


⑦

動かせるほどの大いさです。首には子どもの指でにぎれる太さの棒が入れてあり、棒をもって左右どちらにでも首が動かせるし両手を入れて劇あそびの出来る、この動物たちはもつともよい子どもの友だちになってしましました。

これを作る頃はようやく純毛のオーバー地が出廻ってきた頃で、まだまだ値段は高いものでしたが、四分か五分ずつ切つてもらつて作りました。一個の材料費だけで二、三千円もするこの動物を、『まあもつたない、子どもたちに毎日いじらせておくなんん』といわれるかたがありますが、子どもたちに使わせててもつたない、と思うことを知らない私にはふしげですし、考えてみれば、もう四、五年も毎日ふんだり、たいたたり、投げたり、さまざま目に合わされているこの動物たちが、まだ健在なところをみるとたいへん安い玩具でもあるわけです。

写真⑥は、子どものクッショニに作ったビロード地の魚です。写真⑦は、子どもたちの気味悪がるいもりの類も、こうした玩具では、美しく表現出来て、やはり子どもたちに親しまれてきているものです。遊具の方では、仲間の由良玲吉氏のデザインした、写真⑧の円のジャングルジムは如何でしょうか。実際に子どもたちに使ってみましたがくぐり抜けが容易で、しかも円型であることから、いろいろな幻想がわき、飛行機のハンドルなどにも模して遊んでいたり、据えつけなくとも安定性があって軽いので、室内、屋外どこにでも好きな場所に移動が出来て、子どもたちはたいへん喜びました。色



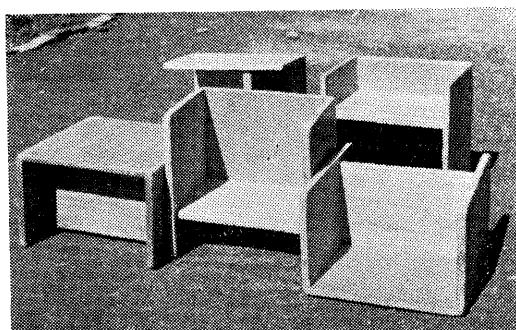
(8)

に坐つてたのしんでいます。これは積木のかわりに遊具としての機能もすぐれたもので、いろいろに組み合せて、汽車や（写真⑩）自動車、ままごとの家、ゆりかごなど、子どもたちは毎日工夫して遊びを発展させてゆきます。そのかわり材料はラバーンを使って丈夫に作ってあります。子どもたちがかえつてしまつた後、この椅子は面白く壁につみ重ね、気のきいた棚にも早代りします。

遊具ではありませんが、ついでですからこの椅子と組になつてあるテーブルを御紹介します。

しまつた後、この椅子は面白く壁につみ重ね、気のきいた棚にも早代りします。

図のようすに半円二個、長四角二個で一組で、

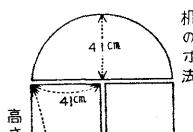


(9)

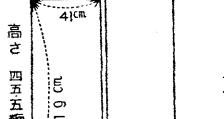
が、写真で見えないので残念なのですが、赤、黄、紺、淡いグレーのぬりわけで、実にきれいです。費用は私がつくった時は普通のジヤングルジムより三割安い位になりましたが。

この他、今私のところで使つてある子どもの椅子、テーブルは是非皆様におすすめしたいものです。やはり仲間の松本文郎氏のデザインです。高さが写真⑨のようすに五通りに使えますので、集会の折、子どもたちは劇場の椅子のような傾斜に並ぶことが出来、とても喜びます。

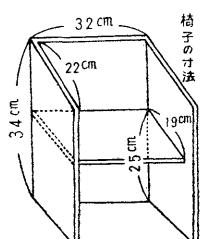
またこの形は一人ひとりの机がわりになることもあります。ゴム粘土など臭いが机にうつって困る場合はめいめい椅子の机をつかつて床



机の寸法



高さ 四十五cm



椅子の寸法



この形の他にそれぞれ独立して使えると同時に、半円を二つ合せて円にしたり、長四角をもつた

たり消したりすることが出来るようになっているのがおもしろく、また形も円筒をいくつかいたことから子どもたちの遊びを豊富にしました。

今庭の遊具でとても子どもたちに喜ばれているのに写真⑪があります。普通椅子が板の上に並べてあるのが多いようですが、こうした簡単な鉄棒のくぎりは、のりよりも簡単で大勢がのれて、少しの時はきくの下にくぐってねて喜ぶ子もあり、おりてこぐ時にもぎるのに便利な高さで、子どもたちには遊覧船、遊覧船と呼ばれ人気があります。

これら庭の鉄製品の遊具の塗料の色ですが、この頃はずいぶん感じの良い色彩の塗料が使われているようで、うれしくなります。今まで銀色が多くたようですが、私はどうしてか好きになれません。この遊覧船も淡いグリーンに、鉄のさくをクリームに塗ってもらいましたら庭がとてものしくなり、傍の花壇の花の色ともよくうつります。

靖子氏の作品で、ごく小さい年令の子どものための軽い大型積木があります。

この他まだ仲者たちの良い作品がいくつかあるのですが、デザインは見たばかりでなく機能がすぐれていなければいけませんので、今後実際に使ってみることが出来る日をまっています。

すぐれた新らしいデザインの遊具、玩具が、もつともっと作られて、また私どもに紹介していただけたり、そして手軽にもとめられるようになつたらどんなに嬉しいでしょう。

(埼玉県深谷市西島六八三の二 さくら幼稚園)

# ある保育室の はなし

## 大熊米子

### 環境と保育

私は、今はある幼稚園の保育室である。今はと言ったわけには、私には申すもいみじき前歴がある為である。卒直に申せば、私は元兵舎であり、武運つたなくなつてからは、せめて敗残の同胞の為に、今一度の協力を！と奮起して援産場となり、三年前に、三たび化して幼稚園となつたのである。ところが、この三度目の住人が、私にぱっと愛情の眼を開かせてくれた。私を心の底からなごやかな気持してくれた。私はこれから生涯を、このかわいい住人の為に、何とかして楽しい生活の場となりたいと思つてゐる。さいわい、戦時の兵舎とて骨太に生れついて、柱も梁も頑丈そのもの、小さい芽生えの情操の為に、多少お化粧に気をつけねば、安全な家となれる自信はじゅうぶんある。まず子どもたちが私のふところに入つて來た時、何が特別美しいと思わないでもよい、どこがとりわけ便利だと思わないでもよい。否むしろ、特別にどこが、何がとい

うのでないこの方が望ましい。さりげなく人々の意識の前にあつて、そこはかとない楽しい雰囲気、快よい環境、ゆき届いた上で何氣ない設備……誠に舌足らずな表現で恐縮だが、私はそういう保育室になりたいと努力している。既存のものに創意工夫を加えて、理想と妥協し、しかも幼いものには最高度のものを与えたい、工夫また樂しからずやである。

私は頑丈ではあるが武骨であるし、味もそつけもない建物である。兵隊さんとのおつきあいとは違つて、子どもにアッピールする近道は、まず視聴覚に、というわけで、子どもが安定感を感じる色と言われているクリーム色、淡いピンクなどを基調としてお化粧した。これで、玄関にある、木曾の山奥の旧家にでもありそうないかめしい角柱も、慈愛深く頼もしいお母さんのような感じで子どもがまつわってくれることになった。また壁であるが、元来うなぎの寝床のような長細い建物を、適当の広さに分けるのだが、ベニヤ板の壁に、画鋲などぶんだんに使つては、いくら塗料でお化粧しても、大病の後の注射の痕のようで傷ましい。ここにはざくざくした麻布を張りたい。お米やお砂糖を入れる袋の、あれである。あんな汚い色のようで、なかなかよい味わいをかもし出す。そしてここには、よい絵をよい額に入れて掲げたい。その絵を見れば、子どもが心から安らぎを覚え、ああ自分の部屋だと感じるようになら……あまりしばしあけかえない方がよい。片面の壁は広いグリーンボールド。涯しない海を夢みたり、広いひろい野原を思つた子どもが、自由に大きな絵が描けるようにしておく、鴨居から上と、天井は吸音テック

スなどで落着いた感じを出し、余分な音は吸込んでもらう仕組だ。また雨などで暗い日の為に照明も忘れてはならない。机、椅子、児童用ロッカー、道具入れの抽出し類、皆色調を整える。一つ一つがしばらく目に飛込んで来る煩わしさから、子どもたちをかばいたいからだ。それから、机や椅子の角は必ず丸くして、抽出しの把手の金属など、突出したものは使わない。安全であることが、何より安定感の基礎となる。部屋を彩る花が、みごとなばらや、カーネーションでなくとも、子どもが摘んで来たたんぽぽの数茎の方が親しみがある。あまり整然とした部屋のたずまいも取りつきにくい。朝来てすぐ本を見る子の為には、新刊の本が本立てからわざと抜き出してあり、昨日の続きの製作をしようと勢込んで来る子の為には、糊も紙もすぐ使えるようにしてある。じゅうぶん意図された気易さである。おや、窓から吹込むそよかぜに、小さい子どもや花が踊っていると見えるのは……カーテンの裾に子どもたちが、自分の服の残り布で切り抜いた子どもや花を、先生がアクリケしたものだ。子どもの手で飾つてもらつて、私はどんなにうれしかつたことか……子どもにもデザインをする隙間を与えて。私は子どもたちにとつて、たっぷりと余裕ある生活の場でありたいのだ。目を奪うすばらしさはなくとも、温かく包んでくれる懐しさがある……そんな感じが子どもの視覚から体内へ、更に心の奥底へ、ひたひたとしみ込んで行く。

さて聽覚に聞いてみよう。ガタガタコトリキキッ……これは机や椅子の脚が、子どもたちの身動きにつれて起る。小さいが、量としては案外多い雜音騒音である。初め、私の床には絨氈が敷きつめられようとした。ところが、水が流れる事もあり、お弁当がこぼれたり、粘土が落ちたり……ということで、床を良質のコルクにして、机や椅子の足にゴムの小靴をはかせることにした。聞いてよい音楽おはなしは、なるべく聞かせるがよいが、聞かなくてもすむ雑音からは解放してやらねば神経がかわいそうというものだ。ところで机や椅子を子どもが扱い易いということだけに重点をおいて、やたらと軽く小さくこしらえることは動き易くなり、したがつて音をたて易くなることを発見した。やはり扱える限度までの重さ、大きさに作らねばならない。次に、積極面で、聞かせたい、音楽やなまし声などの大きさや音質は、子どもが平らかな気持を持つ上に一番大切なことであるが、これは先生の御指導という領分に属する。ただ私としては、聞きよい場所にラジオを備え、また子どもたちが、濫用されざる自由で、レコードを聞いたり、ピアノを弾いたり出来る雰囲気にしたいと望んでいる。ムード保育室、こんな表現があるかしら？

さてもう一つ、保育室分室のはなし、この建物には、廊は室内の陽当たりを考えてほとんど無いがその代り雨の日や夏の強い陽差しを防ぐ為に、店屋さんが軒端につける巻上げの廊のれんを付ける。窓下の砂場はこのれんのお陰で年中無休の大繁盛となる。そしてこの南側の庭は……いや保育室分室のゆかはふかぶかとした緑一色、粘土お弁当すもうにままで……に、利用価値はすばらしい。芝生？ 否、戦時中石炭がらなど撒き固めた土地に芝は駄目、牧草！ 牧草の種をおろすのである。……今にね……ある保育室の夢物語りをこれで終る。

# 園庭全体の しつらえ

土屋真砂子

環境と保育

子どもに呼びかける園庭（門から玄関へ）

幼稚園の朝の門に咲く幼い顔の花々、元気な子、はにかむ子、気むずかしい子、実に十人十色。このさまざまな心に「おはよう」の手をさしのべながら、いつも考えていますことは、この子どもたちが門に立った瞬間、「あつきれいな花が咲き出した、早くいってみよう」「うさちゃんお腹がすいていないかな」「いんこうの赤ちゃんとどうしているかしら」「ぶらんこに乗ろう、おすべりも待ってるぞ」と何となく愉快な雰囲気に引きつけられて、園生活に飛び込んで來たくなるような、すばらしい園庭の営みをしたいものだということです。

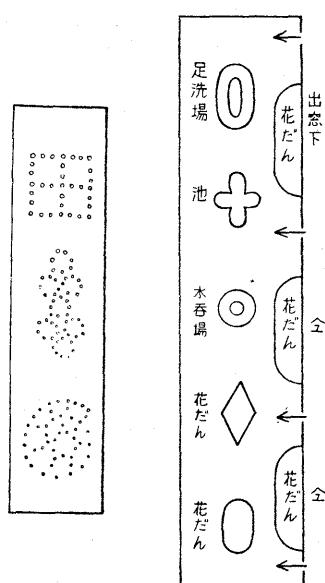
大公園に観る噴水を中心に放射状に築かれた池や花壇、あふれる滝水におどる鯉の群、配色美しく植え込んだ花々、お伽の国のように

な小鳥や動物の家、興味満々の運動遊具、あの文化と自然とほどよく織りなした人工美の一角を、わが園にも欲しいと思うこともあります。それは園外保育の味わいに任せるとして、幼稚園では子どもと先生と一緒にあって、時には植木屋さんのお手伝いをする範囲で、手足まめまめしく心をこめて育てていく、素朴で健康的で、保育内容の充実した経験に常に役立つ、生々とした動きのあるお庭のしつらえが望ましい姿ではないかと思います。

つる草の生い茂って咲く生垣、象やきりんさんの絵のある門、玄関への両側には柴桜のような小花の行列、続いて三角四角六角いろいろな形の花壇、赤い橋のかかったひょう簾池、ばらや朝顔の這い上るアーチ、小鳥の家や動物の家、これらを遠く囲むつつじ、雪柳、これにしだ類の灌木、その背後には銀杏、紅葉、桜、どんどんりなど背の高い常緑樹や落葉樹が、左右のバランスよく、季節の変化を考慮して植えつけられているとしたら、子どもたちはきっと毎日愛らしい露路の花々に靴をぬらし、小鳥の歌声に心はずませて登園していくことでしょう。また蝶々を追い、蟻の行列をみつめ、草をむしり落花落葉を拾って、四季の觀察遊びを満喫することでしょ。テラスの中にも自然や遊び場の工夫を（保育室の窓近く）

新しい様式の園では、南や東に陽当たりの良い窓を開いて、お庭に連なる広いテラスを設けてありますが、非常に備えるためにも、遊びが内から外へ自由に解放的に流れていくためにも、健康衛生の上からも、利用価値多く結構な設備だと思いますが、私は眼を射る

## 例のスラテ



ようなコンクリートの白い光、夏の焼けつくような暑熱、冬の凍てつくような冷寒を、少しでも和らげ、曖昧をたたえたいと思いまして、所々に小さな花壇や池、足洗場や水呑場、砂場などを愛らしく造ってみましたが、変化に富んだ情緒的な遊び場として子どもたちに活用されています。また他園で小さな黒い石を無難作に図案的にちりばめて、田の字やうず巻の石けりの場としているのを見ましたが、子どもの心理を把握したよい工夫だと思いましたので、是非まねて実行したいと考えています。

### 運動遊具の配置や休息の場（庭の周囲に）

ぶらんこ 滑り台 雲梯 枠登り 姥転などは、いずれも教育的価値大きく、外遊びの興味集中の王座であります。が、広い場所を占め、危険の問題も伴いますので、保育室から眼のとどく範囲、しかもかけ廻って遊ぶじやまにならない庭の周囲、落ちてもけがのない

軟かい地盤、緑の葉陰や藤棚を載くような所、次から次へと伝つて遊べるように位置づけたいものです。だんだん登りを楽しんでお山の大将ごつこの出来る築山も欲しいものの一つです。下にはトンネルを掘つて、かくれんぼや汽車ごっこに役立たせたいのです。山裾にひろがった芝生の上では、金園児が揃つて食事をしたり、ねそべつて休息のできますようにしたいのです。

ぶらんこを吊るしたり、木登り遊びの快感も味わえるような大きな古木も是非欲しいと思います。

### 枠を外した砂場の造形（全園庭）

枠の中の砂場、砂に恵まれない園にあっては、一握千金の砂場の維持に気苦労多いことと思いますが、全庭砂場の園にあっては恵まれるままの幸福に馴れ過ぎて、子どもたちの大好きな砂場遊びもいい自由放任になってしまいがちだと思います。そこで私は砂場遊びの誘導はわが園の命とばかり叫んで研究奨励したいものといつも考えています。

庭一面に描いた線路を走つての電車遊び、山や川を築いての町づくりや村づくり、舟や飛行機、動物、人形などを掘つての彫刻遊び、松笠をならべての図案遊びなど、ときどき大がかりな造形遊びを繰りひろげて、これをすべり台や枠登りのてっぺんから鳥瞰したしたら、共同の偉大な力に、美事なデザインに、成功の快感を味わうことでしょう。

# 保育室の色彩

木村俊夫

環境と保育

## 一、色彩調節とは

A 「保育室の色彩は何色がいいですか」

B 「……というような御質問をよく受けますが、色の問題はたいへん微妙です。やれライト・グリーンとかピンクとか言つても、こちらが思つてゐる色を相手にピタリと伝えることが難しいので…」

A 「ほんとにそうです。数字のようにピタリと指示示せないので困ります」

## 二、色を数字で表わすには

B 「詳しいことは本で見ていただくとして、その大体を御話します。色に無彩色と有彩色があるのは既に御存じでしょう」

A 「ええ、白・灰・黒のような色が無彩色で、赤とか青とかが有彩色…」

B 「そうです。無彩色はただ“明るさ”だけですね。しかし有彩色にはその他に…」

A 「色相と飽和度があります」

B 「その通りです。つまり色には三つのディメンジョンがあります

B 「色を施そうとする対象の本来の在りかたやその機能とか使用目的とかを科学的に理解して、これを100%に生かすためには色彩のいかなる性質や機能をそこに利用し發揮させたらよいか、を色彩科学の知識を傾けて考えるのです……」

A 「ずいぶん科学的なですね。それでは色彩調節のために絵画とか美とかに対するセンスのない人々でもできないことはないですね」

A 「では色を数字で表わす方法を教えて下さい」

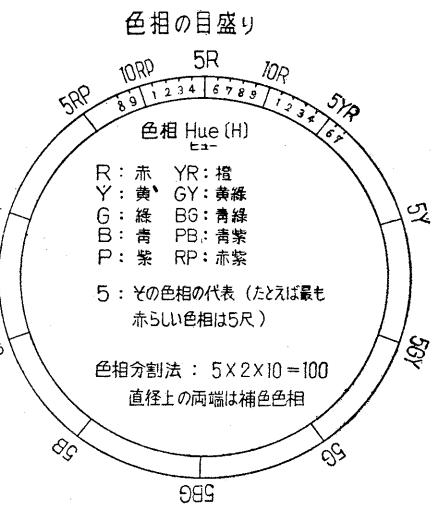
ついでます」

B 「そうです。そういうセンスはあるに越したことはありませんが、なくてもできます。まず色を数字で抑え、あとは理詰めで押しつけます」

A 「では色を数字で表わす方法を教えて下さい」

B 「ところが、今日ではそれができるのです。私たちは色を数字とか記号で取扱うからこそ、工場や学校や病院や乗物やその他のもの複雑な色彩調節のデザインをらくらくとやれるというわけです」

A 「色彩調節っていうのは……」



ね。」この各々のディメンジョンに目盛りをつけるのです」

A 「色に目盛りを……」

B 「そうです。しかし目盛りと言つてもいわば番号です。一番と二

番の感覚的の差が二番と三番の感覚の差に等しいようにしてつける

のです。これにいろいろのシステムがありますが、私たちはもっぱらマンセル・システムを使ってます。たいへん便利ですよ」

A 「ではそれを教えて下さい」

B 「てつとり早く呑込むには図解がいいですから右にその図を描

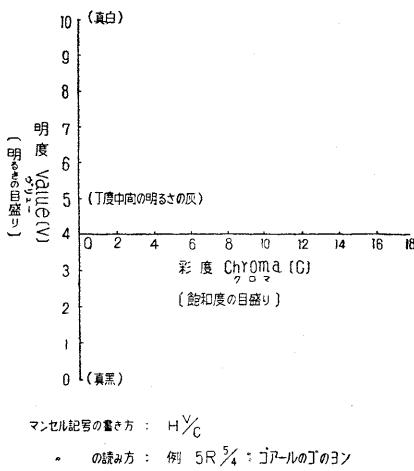
きましたから、よく御覧になつて下さい。……だいたいおわかりで

### 三、保育室の色彩調節

#### (1) 基 調 色

「色をマンセル記号で取扱う要領がだいたいおわかりになりましたと思ひますので、他にも未だ必要なこともありますが、早速に保育室の色彩の問題にあたつてみましょう」

A 「では早速。天井はどんな色がいいでしょうか」



**B** 「ちょっとと待つて下さい。幼児は保育室で天井をどの位眺めますか。いや、保育室にいる全体の時間の中で、足し合わせて一番長い時間にわたって幼児の眼に映る建物の部分はどこでどうか」

**A** 「さあ……」

**B** 「身長や姿勢や眼の高さや顔を向ける方向やその他によって違うことはもちろんですが、保育室にいる間じゅうを通算すればいっただどこを……」

**A** 「そうですね……」

**B** 「もちろん、それぞれの保育室の建築の模様によっても違いますよが……。私は保育室の中にいる幼児を観察するという機会が今までほとんどありませんでしたが、おそらく天井ではないでしょうね」

**A** 「確かにその通りですね。でもどうしてそういうことが問題になるのですか」

**B** 「それは、保育室の色彩調節はまず誰のためににするのか、何のためにおこなうのか、ということを考えるからです。もちろん幼児のためでしょ。次ぎに色彩調節の効果は心理的には眼を通してでしょう。そうすると最も長時間にわたりまた最も広い面積を以て幼児の眼に映る場所や物の色をまっさきに取上げてその色を決めるのです」

**A** 「そしてその色を基調となる色にするのですか」

**B** 「その通りです。色彩調節のデザインはこんな工合に生活とか行動とかに関する科学、なかなか心理学的な知識や見かた、考えかたが必要なのです」

**A** 「よく分りました。でも今のようなお話は幼児心理学の本なんかには出ていませんですね」

**B** 「そうですね。こういうことはその立場に立ちその必要を感じてはじめて観察や研究がスタートする、というわけですね。ですからやはりその現場をよく観察してからないとデザインの構想も困難です。……幼児がどこを見るか、の問題はあなたにもこれからよく観察していただくとして、私自身の想像としては私の子どもの家の中での遊びの観察から推して、保育室での子どもの主要な視野はどうやら腰羽目、巾木、床面のあたりではないか、と考えますがどうでしょうか」

**A** 「そう言われればそういう気がします。子どもたちは保育室の中で遊ぶのに、床に坐ったりエンコしたり、そして積木遊びの際などは壁面を見るより床の方を見ます」

**B** 「そうでしょう。天井なんかほとんど見ることはないでしょうね」

**A** 「本当に。では床の色を基調とすればいいですか」

(口) 床 材 料

**B** 「まあ、床でなくとも腰羽目か、その辺の色でしょうね。しかし床の色彩というと木の生地の色が汚れて薄黒くなっているのが大体の

実情ですね」

**A** 「床を塗装することはできませんか」

**B** 「ワックスなんかを塗ることはあってベンキは塗りませんね」

**A** 「それでは床の色は……」

**B** 「絶望的ではありません。少々高いですが最近の床材料ではプラスチックタイルとかアスファルト・タイルなど、性能の他に色もなかなかいいですよ。一尺角のものですから色を違えて市松模様になりましたから、天井に費用をかけるより床にかけたいのです」

(ハ) 明度及び彩度のデザイン

**A** 「保育所や幼稚園なんかでは本当にそうですね。で、……色は緑か何か……」

**B** 「なるほど。床を芝生とか草原に見たてる訳ですか。それも結構な着想です。しかし、デザインはまず明度よりというのが私の流儀です」

**A** 「はあー。明度からですか」

**B** 「ええ。色が見えるのは光あるが故ですが、物体色の明るいものは光を多く反射しますから、色も使いようで採光や照明の補助手段となりまし、色彩調和や物の明視という点からも明度とか明度差が一番大きなファクターになります。床も含めて室内の各部の明度をマンセル・バリュー（以下V）で示しましょうか」

**A** 「ええ」

**B** 「下の表を御覧になつて下さい。ここについてです

V/C	9/1	7/0~2	8/2	5/3~4	6/3	4/4	6~7/2~3	7/2~3	7/0~2
室内の各部	井 縁 面 木 目 木 面 窓 框 具								
* 天 廻 壁 笠 腰 帽 床 柱 建	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	示板								

の次ぎに彩度を決めます。

さてどうですか。\*印の付いたものだけを注目するとある一定の法則めいたものがあることが気づかれるでしょう」

**A** 「ええ、建物の上から下へ次第に暗くなつてます。彩度はその反対に次第に高くなつてます」

**B** 「そうです。そしてそれはそれぞれの部分の面積の大小の順とほぼ併行しています。面積の大きなところのVは大でCは小ですが：」

**A** 「面積の小さいところはその逆ですね。ああそうだ。そう云えまあ汚れないところは明るく汚れ易いところは暗いから……」

**B** 「汚れが目立たなくてよいというわけですか。なるほど。さすがは幼稚園の先生ですね。この表は室内の色のV/Cに関する一般的の基準というか、まあデザインの定石です。保育室ではCは高い方を用いるのに何のためらいもりません。廻縁や掲示板に灰を使うのは時に非常に美しく見えます。あ、そうそう、笠木や腰羽目がない場合の壁面V<sub>2</sub>でいいです」

**A** 「床のVは腰羽目と同じか少し明るい位ですね」

**B** 「日本間の畳の色を考えてみて下さい。普通の畳はこれより明るい位ですよ。さてこの表は一般的の基準ですからとても明るい部屋とか暗い部屋とかはVをこの基準から少しづつ上下すればよいのです。

また、私は教室の正面の壁のVを7にするとかあまり光のない奥まった壁面を8.5にするとかいうテクニックも時に使いますが、結果はたいへんいいようです。では次ぎに色相に移りましょうか」

## (二) 色相のデザイン

**A** 「私たちは色というと何だか色相を一番さきに考えてましたが、実は逆だったのですね」

**B** 「無理はありません。学校の先生がたから塗板の色は黒がいいか縁がいいか、という御質問は始終いただきますが、未だその明度を一番さきに尋ねられた経験はありません」

**A** 「それほどなんどころがちょうどよいのですか」

**B** 「白墨の粉がしみこんだところでVは4.5くらいでいいでしょう。もともと大切なのはバックの壁のVとのコントラストがあまり大きくならぬことです。色相はそれぞれの教室に必要な雰囲気を漂わせるに適したものがよく、一般教室では緑もよろしいが、音楽室ではチョコレート色もいいでしよう。五線譜をそうしたのはよくありますね。但し、彩度は室内では標識以外にはCで4以下に抑えたいものです。特に注目される部分では」

**A** 「では保育室では……。そうそう。保育室の腰羽目や床の色相は

何がよいでしょう」

**B** 「ではお尋ねしますが、保育室はどんな雰囲気を湛えている」とが最も望ましいのでしょうか。まず基本線はそこから割出されます」

**A** 「さあー。心中ではわかつてるのでですが、いざ口に出すとなると……むつかしいです。まあ、明るく暖かそして楽しい気分かしら」と

**B** 「そうでしょうね。その他に、これはお聞きしたいのですが、園児は玩具をピックリ返したようなゴチャゴチャした雰囲気と、スッキリとした秩序感や統一感のあるのと、どちらが好きなんでしょうか。幼児にはヨゴレていたい、という欲求が相当ある、などというかたがありますね」

**A** 「ええ。子どもたちはフィンガー・ペインティングやドロンコ遊びが好きです」

**B** 「そうすると秩序感や統一感は保育室では遠ざけた方がいいのかな。弱ったな。一般には、小学校などでも、私は秩序感や統一感を尊重してきたのだけれど、幼稚園では……と。どんなものですかねえ」

**A** 「もう一度保育概論を勉強しなおしてみます」

**B** 「私の気にしたのは一室内での使う色の種類の数、わけても色相の数をどの程度に止めるか、ということなのです。数のあまり多いのはゴテついた感じになりますが、しかし同一の色相の中にそれらを二つ三つと入れるとずいぶんスッキリしてきます。ではもう、いや、別の形でお伺いしてみましょう……」

**A** 「どうぞ」

**B** 「子どもたちは保育室の中で遊ぶ時に、そこを野外に町中に大海原にあるいは家庭の座敷の中だと、さまざまに見立てるでしょうが、どういう場合が最も多くまた一番好まれてゐるでしょうか」

**A** 「これも難しい御質問です。さつきから痛い御質問ばかりです」

**B** 「いいえ、そういう訳ではないので、デザインの構想を練るために手掛けというか足掛けというか、それを擱むのに懸命になつてゐるという次第です。それを擱めばまず問題の腰と床の色相が決まり、他は自然に決まる、連鎖反応のようなものですよ」

**A** 「御質問にはお答えできませんでしたが、色彩調節のデザインの構想の仕方と言いますか、考えかたと言いますか、それはよくわかつたような気がします。が、部屋にも西向きのところがあつたりして、そこは夏分には暑いのです。もつともその時刻には園児たちは帰つてしまつた後ですが……」

**B** 「でも保育所なんかでは子どもが夕方までいますから問題になります。要するに、色相の問題はさつきのような必要な雰囲気の他、日照、採光、温度、通風、使用時刻などの問題をもあわせ考えなければなりません。もちろん、保育理念に則つた望ましい雰囲気の醸成が第一の主眼ですが、……夏分あまり暑い部屋には寒色系の色相を適当に加味して見るからに涼し気な感じを湛えることも必要でしょ

う」

**A** 「室内の色彩では」の他にいろいろの遊具や調度の色彩の問題が

……

**B** 「そう。それからアカ組とかミドリ組とか、文字通り色分けの問題がありますしね。また子どもたちの安全を確保するという見地から安全標識の色やその教育の問題もありますね」

**A** 「本当に色の問題はことば通りいろいろございますね。いろいろ勉強しなくてわ。この方面でよい手引書とか参考書がありましたらお教えいただけませんでしょうか」

**B** 「そうですね。では後で別に書いて差上げることにいたしました」

### 参 考 書

稻村 耕雄 色彩論（岩波新書）

岩波書店 昭30

井手 則雄 色彩の扱い方

小山書店 昭29

木村 勉夫 応用視覚論（心理学講座第4巻）中山書店 昭28

色に見る学校—学校の色彩管理—第一公報社 昭30

幼稚園舎の色彩はどのようにしたらよいか

（第7回幼稚園教育研究発表協議会集録）

東京都私立幼稚園協会 昭31

学習効果を高めるための物理的の条件

（教育心理学大系、第6巻）中山書店 昭33

（茨城大学）

# たりがものがもる

ピニコ年幼

葛原しげる

つての児童唱歌の代表ともいべき『鳩ボッポ』に代って、一世を風びしたかにみえた「お手てつないで」（靴が鳴る）の作曲者、に求めた。それは、童謡の作曲でなく『ピアノの教則本』の新作曲を――。

その頃、私は元来、琴・三味線の音をきいて大きくなつて、すこぶる音楽好きであつたので、ピアノの稽古を『教則本』で始めたところ、左手右手の使駆の不如意もさることながら、その曲趣が、邦楽に馴れた私の耳には、どうも快よくない。しつくりしないので、

「日本人向きに、ピアノの手ほどきの曲を作ってくれ」と、せがんだ。

「もつと、コドモにもよくわかるピアノ曲を、作曲してくれ」と、せがんだ。

今は昔、大正の初期、童謡のことが文芸の上から重要視されるようになる十年ほど前、すなわち明治の末期、児童雑誌『小学生』の『幼年世界』また『少年世界』などに、毎号、作曲を得ては、児童向きの唱歌を（いまだ「童謡」といわない）連載し続けていた私は、別のことから作曲者弘田竜太郎氏に求めた。弘田氏、それは、か

つての児童唱歌の代表ともいべき『鳩ボッポ』に代って、一世を風びしたかにみえた「お手てつないで」（靴が鳴る）の作曲者、に求めた。それは、童謡の作曲でなく『ピアノの教則本』の新作曲を――。

その頃、私は元来、琴・三味線の音をきいて大きくなつて、すこぶる音楽好きであつたので、ピアノの稽古を『教則本』で始めたところ、左手右手の使駆の不如意もさることながら、その曲趣が、邦楽に馴れた私の耳には、どうも快よくない。しつくりしないので、

「日本人向きに、ピアノの手ほどきの曲を作ってくれ」と、せがんだ。

「もつと、コドモにもよくわかるピアノ曲を、作曲してくれ」と、せがんだ。

「よし、やってみよう」と二つ返事に、きっと、共鳴してくれるであろうとの予期に反して、言下に

「ソンナの、嫌だよ」と、極めてアッサリしている。その理由に

「日本には、日本人向きの曲があるはずだ。日本のコドモ向きのピアノ教則本は、きっと、世に歓迎されるに相違ないから」と、おおいに勧めた。

「よし、やってみよう」

と二つ返事に、きっと、共鳴してくれるであろうとの予期に反して、言下に

「ソンナの、嫌だよ」

と、極めてアッサリしている。その理由に

「コドモの曲なんか、作りたくないんだ。

オペラをこそ作りたいんで……」

とのこと。コドモ党の私は、いささか、侮辱を感じて憤慨して、いろいろの理由を並べて、再三再四求め、せがみ、頼み、勧めたが、どうしても「よし」といつてくれぬので、その夜はそれで引下ったが、

「コドモの曲なんか」

といわれたことがくやしくて、重ねて翌々日、改めて訪問、

「日本の将来のため、どうしても、コドモの為によい曲が生れなくては——」

も、  
と力説これつとめたところ、さすがの同氏

「そんなに言うなら、ピアノの教則本でなく、コードの歌を、作曲しよう。ついては、君が、いつもいっている「ニコニコピンポン」ということばは、かねて面白いと思っているから、のことばのはいつていい歌を作ってくれよ。その作曲なら、やつてみるよ」

とのこと。私は、帰宅早速作詞にとりかかって、まとめたのが『ニコニコビンビンのうた』である。二節の童謡で、第一節に、太陽を、第二節に、風をうたつて、各節の終を、

それそれニコニコピンピンよ

卷之三

で結んだ。ちと長いので、幼児向きでは

ないが、弘田氏の曲は、たいへん軽快で、

「いいだらう。面白いだらう」  
「ニコニコ ピンピンニコビンビン  
といふ心地がする。  
「いいよ。面白いよ」  
と、私も大よろこび。改めて一前奏曲から弾き直して、声高く歌つては  
区も、弥生町と西片町と隣合せに住んでいたので、「出来たから、今すぐ行く。門の戸を開けといで——」と電話をかけてよこしておいて、あたふた駆け込むように玄関を上るや、応接間に入り込むなり、ピアノを弾きひき、自ら声をはり上げて歌つて、歌い終るや、一オクターブ高い一音を、ポンと軽くたたいて、腰かけていた廻転椅子を、クリリと廻して、後に立ってきいていた私の下腹を、一つポンタたたいて、「ニコニコビンピンニコビンビン、どうだえ」と、いかにもうれしそうであつた笑顔が三十余年後の今でも、まざまざと目前に見る。

と、きわめて楽しく、私もすぐ覚えて、何回も何回も歌い合って喜んだ。そして、二、三のコドモ会で試演して好評を得た。神田三枚セットの絵葉書にして発売した。当時、童画界の第一人者であった岡本帰一画伯入念の揮毫にかかり、印刷も十二度刷を重ねた美しい豪華絵葉書。ついで東光閣書店からは、同画伯の装幀になる童謡曲『二コニコピンピングのうた』を出版した。当時「唱歌遊戯」という名で、その歌曲に振付をしたのが卯牧季雄氏で、方々で踊らせたりしたので、広く世に知られたと思う。のち、麻布三河台小学校から、大久保百人町小学校に転任した時高庸純氏は、自ら、「ニコピンコドモ会」を主宰して、N H K

が愛宕山に移る前の芝浦時代から、さかんに、この歌曲を中心に新作童謡を放送した。

の名作をものして、コドモ界を楽しいものにしてくれたのである。氏自ら、いつか放送で回顧して、「童謡の作曲については、葛原に叱られた」と述懐したとか。私は、叱るどころか、おおいに求め、頼み、せがみ、勧めたのであった。そして、日本の童謡界に、もし「お手てつないで」が無かつたら——すなわち弘田氏が、コドモ曲に手を出さなかつたら——日本のコドモ界は、どんなにつまらないことであつたろうといふ向きがある。その点において私は「よいことをした」と内心たいへんうれしい。ピアノの教則本は、バイエルの、あれでよいとして、歌唱する「コドモのうた」すなわち童謡は、弘田氏らによつて、多くの不滅の名作を遺されて、今のコドモも楽しむ。

ところで、この『ニコニコビンビン』の『た』は、少し長くて、詩としてもまづくて、少なくとも、現代の幼児向きでないで、「何とかしようよ」と、弘田氏とともに

きどき話し合うこと多年ののち、昭和十八年、私どもの「作歌者協会」の有志が、その後の童謡界が、感傷本位のものの洪水から、多少救われて、快活なものが多くはなつたが、追々に品の悪いものが多くなつたのに概して、新作を世に問うことになつたので、いち早く、「幼年ニコビン」と、窮余の名をつけて、ものしたのが、

『ウタトオドリノホン』に収められたが、大戦も後半期の頃で、日本の現状がおよそ、児童文化とは縁遠くなりつつあつた頃なので、二十年前、絵葉書まで発行されたような普及はみられなかつた。しかし、一時、童謡界を風ひしたセンチメンタルなものは、幸にして影をひそめて年あけ、ニコニズムを童謡の世界にも求め、祈り続けた私の今一つの歓喜満足は、家庭音楽としての筝曲に、宮城道雄氏の作曲で、多くのコドモ向きの、手ほどきの曲を提供し得たことである。

ちなみに、右の( )の中の句は省い

由来、邦樂の中でも筝曲には、古來手ほ

で、曲は同じ弘田氏。

ニコニコビンビン

一、オ日サマ キラキラ (ヨイテンキ)  
カゼハ ソヨソヨ (ヨイキモチ)

ミンナ ミンナ ピンピン  
ニコニコビンビン

二、コトリハ ピイピイ (ウタツテル)  
オハナハ ヒラヒラ (オドッテル)

ミンナ ミンナ ニコニコ  
ニコニコビンビン

の後、童謡界が、感傷本位のものの洪水から、多少救われて、快活なものが多くはなつたが、追々に品の悪いものが多くなつたのに概して、新作を世に問うことになつたので、いち早く、「幼年ニコビン」と、窮余の名をつけて、ものしたのが、

『ウタトオドリノホン』に収められたが、

大戦も後半期の頃で、日本の現状がおよそ、児童文化とは縁遠くなりつつあつた頃なので、二十年前、絵葉書まで発行された

ような普及はみられなかつた。しかし、一

時、童謡界を風ひしたセンチメンタルなものは、幸にして影をひそめて年あけ、ニコニズムを童謡の世界にも求め、祈り続けた私の今一つの歓喜満足は、家庭音楽としての筝曲に、宮城道雄氏の作曲で、多くのコドモ向きの、手ほどきの曲を提供し得たことである。

どきの曲があるにはあつたが、いわゆる

童謡氣分のものがほとんど無かったので、

大正六年、朝鮮から初上京の同氏と、私の

第一の仕事は、箏曲童謡の創作であつた。

大正八年六月十五日、東京本郷の中央会堂

での第一回発表会以来、約百曲の箏曲童謡

が、宮城氏の創作によつて、生田流以外の

諸派諸流の箏曲界でも歓び演奏されて、コ

ドモを、おとなまでをも歓ばせていること

を私は大満足に思うと同時に、今更に同氏

の急逝が、弘田氏の病歿とともに、惜しく

て惜しくてたまらないのである。

既述の、かつての童謡界に、大きな存在であつた感傷本位の作品が、コドモをスペイするこことを、いたく頭痛の種とした私たちは、あくまでコドモ向きに、明朗に、円満に、しかも進取的に、健康な童謡をと、同志のものと『日本童謡社』を興し、『日本童謡』を月刊し、別に「ボッボの会」を神田の教育会館の講堂で隔月開催して、當時の茶の水幼稚園の倉橋惣三氏、女高師付小の堀七藏氏はじめ、児童文化各界の第一者者の出演を乞うて、いわゆるニコピン主義のコドモ会を提供した。その頃、西条八十氏の名作「お菓子の家」が発表されたのをみると、その結句が、

「ここに とまって よいものは

ふたおやのない コドモだけ」

であるのに驚いて、私は、何かで、これは困る、と発表したことがあるのを、同氏もよく覚えておられて、先年、私の童謡詩集『雀よこい』の序文で、

「この謡に対しても、葛原さんは、最後の一

行が気にいらぬ。これでは、両親のあるコドモが読むと淋しい気持になる。すなわち、一般のコドモの謡としては、ふさわしくない」

という意味のことを言われた。

さるととも、今の幼児は幸福である。童謡だけでもよいのをふんだんに、教えられて、聞かされて、よく成長しつつある。ときどき、私自ら思う。生れ変つて、今の世に幼児として大きくしてもらえたら……と、心の底から、しみじみ、そう思う。

（昭和三三、五、九。備後、八尋の里にて）

歌の論客だつた。

だが、やがてわれら詩人たちも、永い間

童謡を書いているうちに、次第に児童の現

実の生活に親昵し、童謡を書きながらも、

かれらへの心理の影響を、よりふかく考え

るようになつた。葛原氏の憂慮の原因も、

うなずけるようになつた。北原秋が、各

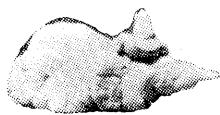
種の雲の名称や文字を、容易に覚えさせる

ような謡を書き出したのも、詩人に、この

教育者の自覚が深まってきたためだったと思ふ。（下略）

と書かれたのも私は、うれしい。

# ドーフ粘土



宮崎洋子

## ドーフ粘土を試みるにあたつて

ドーフ粘土を試みてみたらと言われたとき、いったい何のことだろ。何かの間違いではないだろうか。ドーフの濁音を除けば、ドーフに關係があり、そんな滑稽な解釈まで考え出したりしたが、林先生の試作を拝見し、なるほどと納得出来た。

けれども初めての試みであり、予備知識もなしに子どもに与えることに自信が持てず、日頃御指導いたく美術の先生やその他いろいろな先生がたの助言を受け、園の先生がたの御協力を得て、試みることが出来た。

まずドーフということで頭に浮んだことは、メリケン粉と水がまざり合ったねちねちと手につく軟らかいものであつたが、うどんを作るときの要領を見聞きしてこね合せた。

実験の対象とする子どもたちは五才一年保育児で入園したばかりであり、粘土の経験がない。ドーフ粘土を試みる前提として、出来るだけ普通の粘土に親しませる。

その間に最も適量な処方箋を調製するつもりであった。

粘土を作つてみると、まだはつきり処方箋も出来ぬうちに、早く

子どもに与えてみたくなり、不完全なものを与える結果となつてしまつた。

着色は、粉絵具よりも鮮明な食用色粉にし、はじめて与えるのだ

からと、赤、黄、緑の三色に限定する。

### 1. ドーフ粘土の処方箋

湯呑一杯のメリケン粉に $\frac{1}{2}$ 又程度の色粉を水で溶し、ませると鮮明な赤が出来た。

ほかに二個の固りを作り、一つには、塩をその $\frac{1}{3}$ 程度、ませ、もう一方には、塩を大匙一杯と油三、三滴加える。(適當な油がなく、まことにあわせにミシン油を入れる)

各々ビニールに包み、翌日見ると、何も加えていない固りが一番変化がなかつたので、この方法を用いたことにした。分量が多くなるにつれて、水の加えかた、こねかたで、出来、不出来があり、なかなか調製出来なかつた。

メリケン粉……二百匁

防腐剤(サルチル酸)……大匙一杯(二十グラム程度)

水……カップ二杯(二合)弱

食用色粉……四匁(普通(市販)粘土約十個の分量)

この程度の処方では、赤が俗に言う牡丹色になる。緑は少し薄く、黄は鮮明。

色を薄くするならば、処方の $\frac{1}{2}$ の色粉を使えばよいと思う。安息酸が求められず、サルチル酸を代用する。

### 2. ドーフ粘土を与えて

最初の試み次第で興味が持たれたり、活動が偏ったものになるのではないかと思い、慎重に準備を進めたつもりであつたが、一度めは粉のこねかたで失敗した。

ボールに粉を入れて、適量の水を一度に加え、かきませる。こねあげたときは、水も適量と思われちょうど饅頭のようであった。ビニールに包んでおき、翌朝子どもに与えようと、開いてみると、昨日の饅頭も流れでべとべと手につくありさま、大あわてで部屋を締めきり、子どもたちに見つかぬようにして練り直す。

しかし一度こねたものはなかなか固くならず、仕方なく手につかぬ程度にメリケン粉をつけて与える。

固さも色もちょうど餅のようであり、その上白い粉までついていいだろかと苦笑しながら、粘土板と並べて机の上に置いておく。「餅のようだ」とかえっておだんご作りを奨励するようにならなる。「餅のようだ」と見ておだんご作りに終らずによかつたと思ひながらも、「これは粘土である」とはじめから、その正体を限定し過ぎたことを残

念に思つたが、いたしかたなかつた。

げげんそうに見ていた子どもたちも、ひとりが扱い始めるとき、「僕も僕も」と争つて席に着き、早速おだんご作りが盛んになつた。申し訳にメリケン粉をまぜた位の固さでは変りなく、兎を作り始めたのも、つまんで作った耳は、手を離せば、もと通りペシャンコになる。舟を作り真中を低くしておくと、せつかくの舟底も浅くなつてしまふほどである。それでも一生懸命作つていた。

しばらく丸めたり、叩いたりしていたひとりの子どもが、積木か

ビニールテープを貼りつけるように板の上に粘土を平らに伸して並べ、キリンを作つた。入園一ヶ月目の構成遊びとしては進んだものであり、おだんご的遊びに、やや恐怖を感じていた私も、新しい構成が出てうれしく思った。

二度目からは、固めに固めにとこねるよにしたので一度目のような失敗はなかつたが、固すぎると、ぼろぼろこぼれ、くずがたくさん出来る。三色のうち、黄色が一番使われた。緑は木の葉つばみみたいだと言つるものもあつたが、木の葉に利用されることもなかつた。赤色を薄く伸し、その中に黄色を丸めて入れあんこの入つたお餅が出来たと喜んでいたが色がまざり合い、使えなくなつた。

平面的に三色併合して作るのは、一部の秀れた構成の出来るものだけではなくどが一色づつ使う。また三色を欲しがるものがあつても、ただまぜ合せて楽しむ傾向が多く見られた。二色を合せて、違

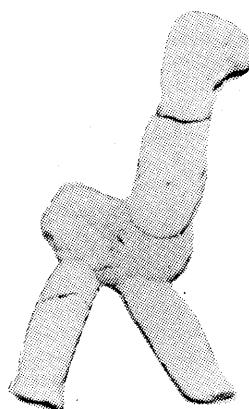
う色が出来たと言つたり、女兒など、皿を作つて、その上に胡麻位の小さな粒に丸めた色とりどりの御馳走を並べる。

フインガーペインティング、絵画、ちぎり紙などと比べて、その扱いかたで子どもの性格、特徴がわかるという傾向は見出せなかつた。

まだ実験の回数も少なく、期間も短かく、資料が少ない為かもわからないが……。

### 3. 補 助 材 料

林先生の実験も参考にさせていただき、園の先生がたとも話し合つたが今の段階において、子どもたちはまだ補助材料が必要としておらず、一応、用意はしておき、必要に応じて与えることにする。



キリン 首と足……黄色  
胴…………緑色  
赤い尻尾がとれてしまった

用意の材料、竹ひご、針金、細い竹を割ったもの（割箸）など。

遠足の後、動物園で見てきた一つこぶらくだを作っていた子どもが「らくだの首が真直ぐ立たんから、やめた」と落胆したようすであつたので、用意の竹を持ち出して首の中に通してやる。それを見つけ三、四人が竹を欲しがる。

兎を作りそれに竹を突き押し、ちょうど、指人形とペーパーサイドを合せたようなものが出来、面白く発展しそうであつたが、動かすと手足が取れてしまい、残念に思つた。

多くの子どもがおだんごの串に利用していた。

#### 4. ドーフ粘土の活用

ドーフ粘土は普通のものと違ひ色が豊富に使えるので活用範囲が拡いでのではないだろうか。

活用の長所としては、

○簡単に好む色を与えることが出来る。

絵具、クレバスの使用と同じように、粉絵具（色粉）のまぜ具合によつて、どんな色でも調合することが出来、泥いじりを嫌う神経質な子どもも鮮やかな色に安心して扱う。

しかしひとりだけ（女児）メリケン粉のにおいを嫌い「くさいのが手につくから嫌だ」と、灰色がかつた市販の粘土を出してきて使う。

○感触がよい（快感を与える）。

丸めたり押したりするだけでも手触りがよい。額にのせてみたり、鼻に付けたり、頬を撫でて満足している。

○材料が比較的安価である。

土粘土またはそれに代るものを感じうぶんに与えられる地域は別として、どこの園でも市販の粘土に頼つておられるだろう。高価な粘土では、一人ひとりじゅうぶんな創作が出来るほど、与えることも出来ず、手のひらに載る位の粘土がせいいつぱいか、組の共有物としてかわり番目に使つてゐる状態からみると、粘土の代用として最適である。

前述の処方箋通りの分量では、約百五十円程度、食用色粉は他の材料よりやや高価であるが、粉絵具を使えばもっと安価に出来、じゅうぶん与えることが出来る。

○清潔で無害である。

固さに注意すれば手や衣服を汚すことがない。また防腐剤も無毒なものを使えばよい。

普通粘土と違い、乾燥してくると、ボロボロになり出し、半乾きの粉が、近辺に散り、一仕事ふえることはあるが、子どもたちの創作意欲を充足させ、表現力を養う上においては、惜しむべき仕事ではないと思う。

○弾力性に富む。

うどんを作ると  
きは、よくこねる  
方がよいそうだ。

こねればこねるほ  
ど、粉の持つねば  
りが出て来る。

ドーフも使えば使  
うだけねばりが出

るので、へびを作  
るには一番よい。

普通粘土ではせっかく作ったへびも「へびだよー」と他の子ども  
をおどかしに行く間に、胴が切れてしまうが、ドーフは、どこまでも  
延ばせる。しかし、弾力性に富みすぎて、彫刻的な、こまかい仕  
事が出来にくい欠点もある。

○温度による変化が少ない。

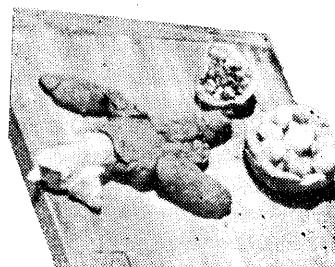
保存に気をつければ、夏・冬、固さが違つて使いにくいといふこ  
とがない。

短所

○材料が永久的でなく、消耗がはげしい。

○乾燥しやすく、したがつて使用前後の処置に手がいる。

○ドーフの性質上、普通粘土より固く練ることが出来にくい。



子 菓 魚  
頭………黄  
体………緑

人形を作つて立たせたら、上の重みで足がベシャンコになつてく  
やしがり「もう一つの粘土の方がよい」と普通粘土で作りかえる女  
児もあつた。

はじめはどの子も「色粘土をちょうどいい」と、色粘土でなければ

遊べないように喜んで使つたが、この頃では、ぱつぱつ他の粘土を  
出してきて使うものが出てきた。

「どちらが好きか」と問えば、皆「色粘土」と答える。

やはり子どもの関心で、色にまさるものはないようだ。

もう少し工夫すれば、ドーフの練り合せかたも簡単に、巧く出来  
るだろう。

○弾力性に富むことは、一面欠点でもある。

耳を作つても、つまみかたが足らないともとに戻つてしまつ。

試みる機会がなかつたが、胡粉や色チヨークを削つて混ぜてみた  
らと思っている。

また、子どもたちの構成能力が進めば、今度は、着色せずに与  
え、作品が出来上つてから、指人形と同じ方法で着色してみたら、  
面白く発展していくのではないだろうかと話し合つてゐる。

失敗ばかり重ねて正しい処方箋も出来ず、実験したとは言えない  
が、これを土台にして更に土台を積んでいただき、ドーフ粘土が  
創作活動の一分野として、大いに活用されるようになることを望む  
ものです。

# 小学校のカリキュラム改正について

武田一郎



小学校と中学校、つまり義務教育学校の教育内容すなわち教育課程、標題のことばでいえばカリキュラムを改善しようとして、昭和三十一年度の教育課程審議会で検討しました。小・中学校のカリキュラムについて、昭和二十二年度すなわち新学制については、昭和二十二年度すなわち新学制が実施されたとき、はじめてできた学習指導要領の一般編と各科編で最初のカリキュラムが示されました。しかしこれは、戦後の混乱時代に急いで作られたので、不完全なところが多かつたため、昭和二十六

年度に全面的な改善を加えて実施に移されました。これは前のに比べてだいぶよくなりましたが、まだものたりない点が気づかれました。とくに戦後十年を経て、社会情勢も変り、また科学の進歩も著しく、どうしてもほんとうにわが国の現状おわり、ひととおり現状を分析して検討しただけです。そこで三十二年度の教育課程審議会では、ぜひとも改善すべき点をはつきりして結論を出そうということになりました。

三十二年度の審議会では、文部大臣の諮問事項のなかで、審議するおもな目標が四つ示されました。第一は道徳教育の徹底であります、第二は基礎学力の充実、そして第三は科学技術教育の向上があり、さいごの第四は主として中学校における職業教育の改

善でした。審議会は本年の三月十五日に「小学校・中学校教育課程の改善について」日高会長の名で松永文部大臣に答申をいたしました。この答申は、1 基本方針 2 小学校教育課程の改訂方針 3 中学校教育課程の改訂方針 の三部と、別紙(1)道德教育の特設時間について、および別紙(2)道德教育の基本的方針、とからであります。文部省はこの答申を尊重して、小・中学校の現行教育課程を改善し、小学校は三十六年度から、中学校は三十七年度から実施しようとしているのです。ただし道德教育の部分だけは本年度から実施するようになり、去る三月十八日付で「小学校・中学校における『道德』の実施要領について」と題する稻田文部次官の通達が出たのです。

それでは、小学校のカリキュラムをどのように改善しようとしたのでしょうか。こ

こにそのべく概略を見ることにしましょ

う。まず道徳教育を徹底するために、これまでどおり全教科全生活をとおしてあらゆる機会に指導をする以外、とくに「道徳」の時間を一年から六年まで週一時間を持つことになりました。この「道徳」は、昔の修身のような教科ではなく、地方の実情や子どもの生活の実態に基づいて、かなり弾力性をもたして指導することになっています。そしておもな目標としては、1日常生活の基本的な行動様式を理解し、これを身につけるように導く 2 道徳的心情を高め、正邪善惡を判断する能力を養うよう導く 3 個性の伸長を助け、創造的な生活態度を確立するよう導く 4 民主的な国家・社会の成員として必要な道徳的態度と実践的意欲を高めるように導く の四つが示されています。そして低学年では、たとえばあいさつ、もちものしらべ、あぶない道、きれいな手、学級ぶんこのつかいかた、おつてだい、よいしせい、

わるいせい、夏のたべもの、水あそび……といふようなことについて、話しあいをしたり、説話をしたり、紙芝居や幻灯を見せたり、ラジオを使つたり、作文を作らせたり、いろいろな方法で指導するわけです。

つぎに小学校で基礎学力をいつそう充実するためには、とくに国語・算数に力を入れることになり、週当たりの国語の時間を一年で七時間、二年では九時間も指導するよう答申しました。また算数は一年で三時間、二年で四時間ですが、三年になると五時間、四・五・六年では六時間もするようになっています。国語ではとくに読解力をつけること、作文の力を強化すること、漢字の学年配当基準を作ることなど、いろいろきめられました。また算数では小数や分数の加減乗除を、小学校で一応やつてしまふことにした点が、大きな変りかたの一つです。その他計量とか図形の扱いをもつと

徹底したいということになりました。

科学技術教育の向上については、審議会でも、小学校時代には単に手先の技術だけに偏ることなく、直接にその基礎となる算数や理科はもとより、あらゆる教科や生活をおとして、科学的に見たり考えたり扱つたりする態度や能力を養うことが強調されました。

こんどの改善で、これまでのやりかたと多少違った線の出たのに家庭科がありま。二十六年度以来、小学校の家庭科では男女共通の学習内容という方針できましたが、今回の答申では、共通の部分とともに「性別の相違についてもじゅうぶん考慮を払うこと」とし、とくに男子には裁縫教材を最少限におさえて工作教材を加味するようされました。また体育では、従来とかく放任されがちだった集団活動を重視すること、五・六年では保健教材を集中的に加えることとなりました。

小学校のカリキュラム改正について、とくに幼稚園関係のかたがたに注意していただきたことがあります。それは審議会の答申の最初に述べている「基本方針」の(5)の(イ)に、

「教科およびその他の教育活動の目標、内容の配列に当っては、小学校・中学校間の関連をいつそう密にし、学年の児童生徒の発達段階に即して一貫性をもたせること。」

なお、小学校低学年においては、家庭・幼稚園などにおける教育との関連をじゅうぶんに考慮すること。」(傍点筆者)とあることです。じつは私も審議会の一員でしたので、みんながさかんに小・中学校の一貫性ということを主張していたとき、もちろんそれは大切だが、小学校と幼稚園との関連についても注意してほしいと発言したところ、さいわい多くの人の賛同を得て愉快で

感じたことがあったためだと思います。こんどの審議会の答申で、一年生の音楽と图画工作が、従来週二時間のところが多くなったようですが、三時間になりました。このことは、低学年における自由な自己表現とか美的創造活動の重要性が認められた結果であるとともに、幼稚園と小学校とのカリキュラムの関連をいつそう強める一つのくさりともなりましょう。

幼稚園が義務制でないため、幼・小のカリキュラムの完全な関連ということは困難であります。今日、小学校カリキュラムの改善が画期的に普及し、なおかついよいよ普及しようとする今日、小学校カリキュラムの改善を機会に、両者の関連をあらためて考えなおす必要があります。そして幼稚教育本来の目的を実現しながら、しかもそれが小学校教育へしそんにつながるようになしたいものです。

(北海道学芸大学長)

上げをお手伝いしながら、強くこの必要を

## しつけるということ



岩 丸 茂 雄

『子どもには子どもの人格があり、おとな

の縮図ではない。故におとの生活を子どもにおしつけてはならない。子どもは子どもらしく伸ばさなければならない。』

という考え方たが教育の底流をなしてい

るようです。たいへん結構なことであります。私は反問します。

「現代の社会機構や科学生活を考え、おとなが知っていることで、子どもがまだ知らない面で必要なことは、『こうするものだ。』と教える必要がないだろうか。」

「私は更にいさがります。  
『知識として理解し、自主的な行動をとる  
まで待つことのできない事項は、知識的な  
理解はあとまわしにしても、しつけること  
の必要はないものだろうか。』

『しつけなどは古い教育方法である。おし  
け教育である。』

「生れたばかりの赤ちゃんが、昼と夜との  
区別なく泣いたり乳を飲んだりします。そ  
れを昼は寝め夜は眠るような生活をさせて  
いくのは、赤ちゃんは理解するのでしょうか  
か。」

お前の頭は古いと云われてしまえば、これから勉強して、新しいことを学ばねばなりません。

私はしつけということばを調べてみまし

た。大字典によると「躾」とも「躾」とも書くが、もともと日本古来のことばで、身を花の如く美しくするという意味から組合せた日本で作った文字であります。意味を先にして作った文字を会意と云います。いわば当然字でありますから、正しくは「しつけ」と書くものらしいです。しつけとは裁縫で云うしつけ糸の如く、その形をおしつける為に用いることばらしく、なるほど教育的ではないらしいです。

しかしまだ私はあきらめません。次に、

一、二の例を挙げて考えてみましょう。

「生れたばかりの赤ちゃんが、昼と夜との

少し長じて、いつでも食事をしたがる子どもに、一日三回、おやつを含めて四回ないし五回の食事時間を定めさせるのは、子どもに生理的知識を得させてからするものでしようか。

更に重大なことは、食前の手洗いは何の為にするのか、まさか細菌学や病理学の知識を得てから、理解ある行動をするまで待つことが許されるでしようか。昔の人類は伝染病の伝染経路を知らなかつたから、手洗いの必要はただ手のよごれを取るくらいにしか考えなかつたでしよう。そして疫病と称して恐れていました。現代は医学の進歩のおかげで特に胃腸系統の病気の伝染予防は、菌が口に入ることを防ぐことではなくて完全に効果を挙げることができることを知っています。だからと云つて、子どもにそこまで理解させての行動が期待できるでしようか。それよりは

「おでてを洗いましょう。」

と、まず手を洗うことをしつける必要を先にすることだと思います。長ずるにより、知識的裏付けを得て、『なるほどこういう理由からそうしたのか』と納得することでしよう。

こういうふうに、必要なことは、理解と手手続きを経ずに（それはまだ理解の能力のない時期のうちに）しつけておいて、後に理解の裏付けをする教育を「しつけ」と云いたいのです。こういうことはたくさんあると思います。交通のはげしい街路で遊んではいけないとか、交通機関の利用について注意すべきこととか、子どもの考え方だけにまかせておいたら、生命に関するような事故を引起すことがあるでしよう。こんな場合には、子どもの要求は無視してまで『こうするもの』と押付ける必要があるべきでしよう。

日本は子どもの天国だと云われます。逆に云えればあまりにも甘やかし過ぎるということになるのです。『子どもだから……』と言えば、反社会的なことも許されるといふのはどういうものでしよう。『よっぽらいだから……』というよっぽらい天国とともに、困ったものだと思います。外遊をしてきた人の話を伺うと、外国では非常に強いつしつけをしているそうです。

(お茶の水女子大学付属小学校)

ただ、ここで考えなくてはならないことは、むやみやたらにしつけと称して押付けをしないようにしたいものです。子どもが長じて後、知的理解を得て、なるほどと納得のいくことでなくてはなりません。そしてそれが現在子どもにとって幸福になることでなくてはなりません。親やおとなの方も都合主義からくるしつけは厳につつむべきでしよう。その方が子どもにとつもありがたいことであるはずです。いわば大乘的な愛情です。

# 「うつぼ物語」童話化の試み (二)

本田和子

## としかげさんとふしぎな琴

ある春のこと、としかげさんがいつものようにお琴をひいておりますと、どこからかふしぎな物音が聞こえてきました。

「コーンコーンコンコーン」それは木を切りたおしている音のように聞こえますが、としかげさんのひくお琴の音に、それはそれはよく合って、とてもきれいにひびきます。

「コロリンシャンシャン」お琴が鳴れば、

「コーンコンコンコーン」とふしぎな物音。

としかげさんは耳を傾けました。

「何といいうい音を出す木なんだろう。あの木でもってお琴を作つたらば、きっとすばらしいきれいな音色のお琴ができるにちがいない。」としかげさんはそう思うと、もうじつとしていたれません。さつそく、ふしぎな音をたずねて旅に出ることにしました。

「一体あの音はどつから聞こえてくるのでしょうか。」としかげさん

は近くの山にのぼつて見ました。すると、むこうの方に、天にまでとどきそうな高い山が雲に包まれてそびえています。

「コーンコンコンコーン」ふしぎな物音はどうやらその山の方からひびいてくるようです。としかげさんはその山をめざして出発しました。

川を渡つたり丘を越えたり、広いひろい野原を横切つたり、としかげさんは一生懸命に歩きました。ふしぎな音のする方へ、あの高い山の方へ、走るようにしていそいだのです。

とうとう山のふもとまでやつてきました。ああ、一体これは何でしよう。ここは一体どこなのでしょう。としかげさんはゾーッと身體中が冷くなるほどの恐しさを感じて、立ち止まりました。だって、そこには、はりがねのような髪の毛をして、真赤な顔に金のまわりのような眼をきらきらさせた大男が、鍬の大きな手足で、一生懸命に一本の大きな木を切りたおしているのです。その木というのが、またたいへんなものでした。山の向こう側の深いふかい谷

底に根をはって、すくすくと伸びしげり、その一番上は雲にかくれて見えません。その枝は、となりの国までとどいています。そして、その木のがんじょうなことといつたら、大男が汗まみれになつて斧をふるつても、ほんの少ししかきりこむことが出来ないのです。

「ああ、たいへんな所へ来てしまつた。私は一体どうなるんだろう。」としかげさんは恐しさとおどろきでガタガタふるえながら、こう思いました。と、その時、大男はふと手を休めてこちらを向きました。

「おやおや、こんな所にいるのは誰だ、お前は何者だ。」大男もたいへんびっくりしたようです。大きな眼を自転車の車輪かなにかのようにくくるくる廻しながら叫びました。

としかげさんは覚悟をきめました。遠い日本の国からやつてきて、お琴の勉強をしているのですもの、どんなことがあつたって、せつかくここまでやってきて、この木をひときれももらわずにかえるなんてことは出来やしません。としかげさんは心を静めて言いました。

「私は日本の国から來たとしかげです。この木の片はしをいただいてお琴を作りたいと思つて、はるばるやつてまいりました。どうか小さなお琴を作るだけこの木をわけて下さいませんでしようか。」大男はますますその目を大きくし、その顔を火のように赤くしました。

「そんなことを言つてもだめだ。この木は私のものじゃなくて、天女の植えた木なのだから。私は今まで、この木の番人をしてだいじ

に守ってきた。今日はやつと、天女から木を切るようにと言つけてられて、長い間だいじに番をして育てたこの大木を、切りたおしはじめたところなのだ。私だって、この木を好きなように自分のものにすることなんて出来ないので、ピヨイとどこからかやつてきたお前なんかに、この木をわけてなんてやれるものか。」

そして、大男は大声でどなりました。

「さつさとかえれ。かえらないとのみにのんでしまうぞ。」

と、その時、あたりが急に真暗になりました。「ザザーッザーッ」といへんなどしゃ降りです。「ピカッピカピカ」真暗な空を裏二つに分けるように金色のいなすまが光りました。

そして、ああ、あれは何でしょう。真黒な空から、今、まっしぐらに降りてきたものは。

それは大きな竜にまたがつた一人の小さな男の子でした。男の子は、驚きあわてている大男に、金色のピカピカ光るふだを一枚渡すと、アッという間に、また暗い空にかけのぼつて消えていきました。金のふだには、美しい字で「この木は、日本のとしかげのものである」と書かれありました。

としかげさんは、その木で立派なお琴を三十造りました。お琴を造る時は、天から子どもが降りて来てお手伝いしてくれましたので、すばらしいお琴が、出来上つたのです。

としかげさんは、さっそくこのお琴をひいてみようと思いまして。向こうの森の中で、ひとり静かにひいてみましょう。でも、何

しろ三十のお琴ですから、運んで行くのがたいへんですね。ところが、その時、天からやさしい風がスースと吹いて来ました。おやおや、三十のお琴はフワーッとその風にのって、舞い上つたではありませんか。そして、向こうの森の方へスースととんでいきます。

としかげさんは、静かな涼しい森の中に、ひとり坐りました。さあ、思いつきり、ここでこのお琴をひいてみましょう。どんな音がするのでしょうかね。

「コロリンコロコロコロリンシャン。」まあ何というやさしい音でしょう。その次はどうでしょうね。

「コロリンコロコロコロリンシャン。」これもやさしいやさしい音です。

三十のお琴のうち、二十八は同じようにやさしい音がしました。

そして、二つだけが、まあ何というすばらしい音でしょう。

「コロコロコロリンコロコロリン。」と玉をころがすようなひびき、そして、そのお琴があたりにひびくと、まわりの木も草も、山や谷までがいっしょになつて、何ともいえないひびきをたてるのです。そして、そのひびきが、しづかにしづかに消えていくと、心の中がすつきりとして、本当にきよらかな気持になるのでした。

としかげさんは、毎日毎日ひとりで一生懸命にお琴をひきました。二十八のお琴はいつもやさしく、そして二つのお琴はいつもふしげなくらいきよらかに美しく聞こえました。

ある春の日、としかげさんは、森の向こうに、花のいっぱい咲いた野原のあるのに気がつきました。ぽかぽかといいお天気です。今日はひとつお花の中でこのお琴をひいてみましょう。

まわりの山々は、春のかすみにけむるように包まれ、森には新しい木の芽がやわらかい緑色の姿を見せていました。一面に咲いた白や黄色の野原の花の上に、お日さまがにこにこと照って、夢のような春の日です。としかげさんは、あの美しい二つのお琴をひきました。花たちも、森の木も、まわりの山々まで、耳をかたむけてお琴の音に聞き入り、時にはそつとそれに合わせて歌を歌つてくれるようです。としかげさんはすっかり楽しくなつて、何もかも忘れてお琴をひき続けました。

すると、天から何とも言えないふしげな音楽が聞こえてきて、紫の雲が静かにしずかにとしかげさんの方に向かって降りてきました。その雲の上には美しい天女が七人、手をとりあって立っているではありませんか。としかげさんはびっくりして、お琴をやめ、ついにいねいにおじぎをしました。

「あなたは誰ですか。ここは私たちが、春になると花を見ようと思い秋になるともみじを見るために、天から降りてくる所なんですよ。」花の上に降り立った天女は美しい声でふしぎそうにたずねました。  
「鳥もけものも住んでいない淋しい所に、よくひとりで住んでいますことね。」ともう一人の天女も首をかしげます。

「ああ、もしかしたら、この人は向こうの山の大きな木でお琴を造

つた人ではないでしようかしら。」と、別の天女が言いました。

「そうですそうです。天のお使いからあの木をいただいて、お琴を

造った日本のとしかげです。」

「まあ、それならば、あなたはここでひとりで、お琴をひいていてもよかつたのですよ。ほかの人気が誰も聞いていませんし、ちょうどよかつたのです。」もう一人の天女がうれしそうに言うと、七人が顔を見合わせて、にっこり笑い合いました。

そして、別の天女がやさしくたのみました。「さあ、私たちにお琴をひいてきかせて下さいな。」

としかげさんは、あの二つの琴を並べました。七人の天女たちは楽しそうに手をとり合って耳を傾けています。どんなにかして、この天女たちを喜ばせてあげたいと、としかげさんは一生懸命でした。「コロコロコロリンコロコロリン」お琴の音はいつもより、もっと

もつと美しく、春風のようにやさしくひびいていました。

「この人は、世界中で一番上手にお琴をひける人です。でも、西のお山に住んでいる七人の先生に教わったら、もっともつと上手になることでしょう。」六人目の天女が言いますと、七人目の天女が一步前に進み出てやさしくとしかげさんの手をとりました。

「西の山に住んでいる七人の人は、私たちが天の上で音楽をしたり踊ったりする時、それに合わせてお琴をひく人です。そこへ行つて、いろいろなひきかたを覚えてから、おくにへおかえりなさい。あなたのひくお琴の音が天の上までいつも美しくひびいたら、私たちは

どんなにか楽しいことでしょう。お琴をひくたびに、私たちのこと

を思い出してくださいね。」

としかげさんは、天女の言いつけどおりに西の山へ行くことにいたしました。また、いつかのようすにスーッと風が吹いてきて、お琴をはこんでくれました。

少し歩いた所に、大きな川が流れています。どこにも橋がかかっていますので、どうして渡りましようかと、としかげさんは首をかしげました。お琴の方は、風に運ばれて、フワーッと向こう岸に渡ってしまいました。やれやれ困りましたね。

その時、一羽の大きなくじやくが出てきて羽をひろげました。川の上いっぱいに美しい羽を大きく大きくひろげました。

「ああ、ありがとう。」としかげさんは羽の上を渡つて向こう岸へきました。

少し行くと大きな谷がありました。どうやつて向こう岸に行きましたよ。長い鼻をショウカ。お琴は、フワーッと風に運ばれて向こう岸に着いてしまいました。

おやおや谷底から大きな象がのそのそと出てきましたよ。長い鼻をニユーッと向こう岸までのばしました。

「ああそうか。橋をかけてくれたんですね。どうもどうもありがとうございました。」

また行くと、暗い森がどこまでも続いていました。お琴はフワーッと風に運ばれて、森を越えて行きます。何とまた真暗な森で

しょう。道を間違えずに行けるでしようかと、としかげさんが少し心配になつておりますと、中から出でたのは、白いおひげのやさしそうなおじいさん。「こちらへいらっしゃい」と手をとつて、暗い道を上手に向こう側まで連れて行つてくれました。

暗い森の向こう側は、やわらかに日が照つて、静かな風が吹いております。そして、お母様の眉のようにやさしいふつくらとした山が七つ並んでおりました。

第一の山にとしかげさんはのぼりました。静かにしづかに眠つてゐるような草や木を驚かせないように、足音に気をつけてのぼりました。山のてっぺんには、大きな梅の木が一本、真白な花を咲かせています。いいにおいが、あたりいっぱいにしています。そして、その下に水色の着物を着た男の人が、静かに坐っていました。

としかげさんはそつと近寄つて、ごあいさつをしました。

「今日は。」

「おやおや、これはこれは、あなたはいつたいどなたですか。」

「日本とのとしかげです。天女に教えられてまいりました。」

「それはまあ。それでは森の向こうの、谷の向こうの、そして大きな向こうの、花園からおいでになつたのですね。よくいらっしゃいました。」

そこへ、風に運ばれてお琴がスースとやつてきました。そして、

二人の前にそつと並びました。

「これは、あなたのお琴ですか。どれ、ちょっとだけ鳴らさせて下

さい。」その人は真白なほつそりした指で、ちょっととお琴の糸をはじきました。「コロコロコロリンコロコロリン。」

まあ何という音でしょう。眠つたように静かだった草も木も、そして、向こうに続く六つの山までが、あまりきれいな音に、びっくりして目を覚ましたようです。

「おお、何とすばらしい音でしょう。向こうの山の人たちにも聞かせてやりたい。」

としかげさんと、その人は手をとり合つて第二の山にのぼりました。第二の山にも同じように梅の花が真盛りでした。そして、その下にやはり水色の着物を着たやさしそうな男の人がひとり坐つております。

「おやまあ、珍しいお客様ですね。どんな御用でしようか。」

「向こうの花園から、天女に教えられて來た、日本のとしかげさんという人です。とてもすばらしいお琴を持っていますので、いつしょに集まりましょうよ。」

三人はいっしょに第三の山にのぼりました。第三の山の人も喜んでいっしょになりました。

こんどは四人で第四の山にのぼり、第四の山の人を誘いました。第五の山、第六の山をたずねて、七人になりました。こんどはいよいよおしまいの第七の山です。

この山は、今までの山と少しちがうようです。地面が見えないくらいに紫に光る小さな石がいっぱい並び、木々は皆、緑の葉の間から黄色い小さな花をのぞかせています。山全体に、その花がよくに

おついて、所々にくじやくが遊んでいました。

山のてっぺんには、やはり大きな梅の木が一本立っていました。大きな大きな梅の木です。その枝はあたりにずしりとひろがって、ちょうどその下は傘の下のように、空もよく見えないようでした。そして、その梅の木には真赤な花がいっぱいに咲いていました。下に坐った男の人は、真白な着物でした。少し上を向いたその顔も、着ている着物も、梅の花の色がうつってぼーっと赤く見えるようでした。

「まあまあ皆様おそろいでよくいらっしゃいました。珍しいお客様

ですこと。」



した。

(第二話完)

「うつぼ物語俊蔵の巻」の一部を二つの物語に童話化してみた。後者は、長さもことばづかいも、物語のもつ雰囲気も、年長児以外には無理であろう。お話を聞くことを好み、聞く態度のできている五才児級なら、じゅうぶんに楽しみ、味わうことができると思われる。

「幼児の教育」四月号に大熊米子氏が、うつぼ物語よりヒントを得て作られた「ビー

の笛」を発表されているが、古物語から素材だけを拾い出して、まつたくの子どもの世界の住人たるフレッシュな愛らしい物語を作り出されていくことに感心し、興味深く拝見した。自由に、物語にとらわれるごとなく、その中から童話的な素材だけを取り出して、想像と独創の翼を自在にひろげて物語を創作していくことも一つのいきかたであろう。

それに反して、ここで試みは明らかに原文にとらわれたいきかたである。原文のもつ素朴で、何か大どかな神仙めいた味わいと、その世界を子どもの中に再現してみたいと思ったからである。

私たちの祖先が産み出し、年月の波をくぐって愛され伝えられてきた古物語を、童話として幼い人たちに伝える一つの試みとして、お読みいただければ幸である。

水色の着物の六人の人も、としかげさんも皆、赤い梅の花の下に坐りました。皆に梅の花の色がうつって、顔も着物も、うす赤く見えます。いいおい。やわらかい風が時々八人の間を吹いて過ぎます。

としかげさんは、七人の人にかこまれて、あの二つのお琴をひきました。心を静かに落ちつけ、ただそのお琴が七人の人を喜ばせるようにとそれだけを考えてひくとしかげさんの姿は、本当に愛らしく見えました。七人の人たちは、皆、顔を見合わせてニッコリ笑い合い、うなぎき合いました。こんな人になら、自分たちの知っているだけのお琴を教えてあげたいと、心の中で思つたのでしよう。

梅の花がときどき、チラリチラリと散って、としかげさんの髪にも、七人の人たちの水色や白の着物の肩にも、可愛らしくとまりました。



# 教育課程の実践的研究(2)

神戸大学教育学部付属幼稚園

野村泰晃子

## 五、カリキュラム運営の実際と問題点

### (一)運営の実際

#### 1週案

まず月単位の指導計画から週単位の指導計画を考えた。週計画作成について特に注意した事項は次のとおりである。

- ① 週計画は一週間の生活が連続できるように配慮する。
- ② 一週間のおもな生活は、単に教師ばかりでなく幼児にも理解させ、できるだけ幼児の自主的自発的な態度を刺戟し、希望や期待をもたらせる。
- ③ 今週の進展を考慮し、翌週の計画を修正したり調整したりする。
- 以上を注意して立案する。
- 2 日案
- 日案つまり一日のプログラムであるが基本的にどのような注意が必要であるかというと、
- ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ 幼児の興味、欲求を満たし、生理的条件に適応しなくてはならない。(特に休息に注意する)
- 室内と戸外の生活を適当に配分する。
- 前後日との流れが流動的になるようにする。

#### 3 単元展開例(その一)

(1) 年少組 男十六名 女十八名 計三十四名

(2) 時期 四月中旬～下旬  
単元 友だちと先生

(3) (4) 設定の理由

① 四月の努力目標として「たのしく幼稚園に行きましょう」をとりあげ、単元「うれしい幼稚園」「友だちと先生」の二単元を設定した。

② 今まで家庭生活をしていた幼児が初めて新らしい生活（集団生活）をするのであり、その人間関係として先生とお友だちが中心になるのでこの単元をとりあげ四月の望ましい経験をさせたい。

(5) 指導の要点

① 年内を通じて生活経験の均衡をたもたせるために、本単元は先生と友だちとの最初の生活をどのように経験させることが入園当初の望ましい活動であるかを特にねらった。

② 「うれしい幼稚園」の単元においては幼稚園のようすを子どもによくしらせることがねらったので、本単元ではだんだんと集団生活ができるよう、年長組のお友だちと遊具や教具を使って遊んだり、先生にさそわれたのしく遊ぶことができることをねらった。

③ 年少組三十四人中集団生活に入れないで、泣いたり、付添いからはなれない子どもは、教師は特に友だち関係、教師との接觸を多くして早く集団生活に入るようとする。

(6) 指導経過（次頁の表を参照）

単元展開例（その二）

(1) 年長組 男十七名 女十七名 計三十四名

(2) 時期 四月中旬～下旬  
単元 新しいお友だち

(3) (4) 設定の理由

① 四月は待ちに待っていた年長組になつたよろこびと、年少組を迎えたよろこびにすべての子どもたちは胸をおどらせて

いる。このよろこびは大きくなつたということと、新らしい遊び友だちがふえてうれしいという二つの気持ちである。この時期に「新らしいお友だち」をとりあげることにより、交友関係をたのしいものとさせたい。

② 新入園児は幼稚園の生活については全く未知である。そこで何ごとも年少組の上に立つてお手本となり、年少組をかわいがって遊んであげるよい時期である。

(5) 指導の要点

① 年長組になつたよろこびは年少組を迎えて自分たちはお兄さんお姉さんになつたという気持ちによって倍加するが、これをしっかりと自覚すること。

② 小さな新らしいお友だちをいっしょに遊んであげたり、親切にしてあげる態度を身につける。

③ 子どもも集団生活になれて新らしい友だち関係を拡張していくことをねらう。

4 単元外活動の指導  
質的、量的に深化拡大させるように次の点を考慮して指導する。

4月	お友だちと先生	目標	年長組のお友だちの遊びをみるとことにより、自分たちもすきな遊びをみつけて、たのしく遊ぶことができる。
16日～27日	友だちや先生とあそぶ		
幼児の活動		指導上の留意点	実践の反省
<ul style="list-style-type: none"> <li>○友だちや先生とあそぶ</li> <li>・年長組の遊びを見る。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊戯室での積木遊び</li> <li>・テラスで粘土遊び</li> <li>・ままごとあそび</li> <li>・小鳥や兔の世話をしているのを見るなど。</li> </ul> </li> <li>・お部屋のあそび           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ままごと</li> <li>×ままごとセット、ござみ木などで用意された場所を利用する。</li> </ul> </li> <li>×草花で御馳走つくり</li> <li>×年長組のお友だちが入って来て一緒に遊ぶ。</li> <li>×裏庭に草つみに行く御馳走をお客様に出す。</li> <li>×年少と年長の子どもは御馳走をつくりお客様になるのを交互にする。</li> <li>×人形をねかせる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○じやまをしないで見る態度を養うために、お友だち二人手をつないで見て廻り、遊び方や遊び道具の名えに気づかせる。</li> <li>○年長組の遊びをみるとことにより自分も紐の汽車にのって走ってみたり、ままごとのごちらそうつくりがしてみたいといいう気持をもつよう仕向ける</li> <li>○遊具や玩具の使い方がわかりお友だちと遊ぶようにする。</li> <li>○付添からはなれなかったり、人の遊びをぼんやりみていたりする子どもが遊びの中に入るように、教師はさそいかけていっしょに遊んでやる。</li> <li>○ままごとセット、ござ、つみ木、花、草などを用意してやり、遊びたいという意慾をもたせる。</li> <li>○教師は準備した小道具や机を出して、図のように配置して環境構成をしてやる。</li> </ul> <p style="text-align: center;"> </p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年少組女児I子は入園翌日から年長組の部屋に行き遊んでいたので、年長組のあそびをみて廻っても、子ども同志で名まえをよびあい、つながりができるよかったです。</li> <li>○年長組の女児が特別保育室でままごと遊びをしているのを見たがI子もまじっていた。このように積極性のある子どもによって、次への遊びの発展に影響した。</li> <li>○保育室はいつも椅子と机を固定しないで、度々場の内容をかえてやったので、子どもの活動が力動的であった。</li> <li>○指導上の留意点でている図式の如くに、教師が初め環境をととのえてやった。</li> <li>○年長組の女児、男児が年少組の部屋に入って来てままごと遊びをみている。すぐ遊びの中に入ろうとしたが、年少組女児I子が友だち(K子年長組)の名まえしょと共に教師が「いっしょに遊びましょう」とさそいかけて入った。年長組7、8人の子どもが中心になって遊んだので、教師は他の遊びのグループに入っていた。</li> <li>○御馳走にする適当な花や草が少ないので、花壇にもっと手軽にとってもよい花をつくってやりたいと思った。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・つみ木遊び</li> <li>×つむ</li> <li>×ならべる</li> <li>×動かす</li> <li>×穴に通す</li> <li>×たたく</li> <li>×連結させるなど</li> </ul> <p style="text-align: center;"> </p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師は御馳走つくりの場所で子どもといっしょにしてやる</li> <li>○箱つみ木、とんとんつみ木などをテラスにござをしいて用意しておき、ままごと遊びに入れないと男児にはこの遊びをさそいかけてやる。</li> <li>○後しまつが中々できないが、遊んだあとは、やりっぱなしにならないように教師もいっしょになってかたづける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○つみ木の箱が割に重いので遊びに入りやすいようにテラスに出ておいたのが効果的であった。傍観者も多かったが男児が興味をもって遊んでいた。</li> <li>○年長組の男児Kが車のついた汽車をもって来てつみ木のまわりを動かしたので、年少組の男児もつんだりならべたりしていた。つみ木を前、後に動かし、しゃりしゃりといいながら静的から動的に発展した。</li> </ul>
以下省略			

## 自由遊びの実際指導例 舟遊び

もびの場	遊びのかた	教師の働きかけ	結果
舟あそびの話し	○金属性（ゼンマイじかけ）や木製の既成の舟をはじめて出した時、子どもの目の色がかわった。	①池の舟あそびがはじまるといろいろの問題がおきるので、それらを見るとおしゃなず最初に次にした。②約束をりんできました。③交代してとじやしょう。④大事につかいましょう。⑤池へはまらないようにならう。⑥使った後は、この箱の中へかたづけましょう。	○教師と子どもたちで約束をきいていったよだがよかったです。 ○大きな紙に「わすれないと書いてあるわね」と書いた。マック舟入れの上のところにはつたのでよく守っていました。
庭の池で舟を走らせて遊ぶ	○夏になると水が子どもを呼ぶのか、子どもが水を求めていくのかしらないが、とにかく水遊びとくに舟を走らす事が興味中の興味といった状態。 ○高いところから舟を池へ投げたので、水が大勢にかかった。 ○舟の数がたりなくなったり年少組の舟には『うめ、年長組の舟には『きく』とマジックでサインをしている	○高いところから舟を落としたからみしぶきがかかるので、子どもたちがたずねると「もうりせんだから」といいった。○これから数をかぞえてかたづけるようにしようと相談をした	○なるほどといった顔でもう荒いことをしなくなった。 ○数がたりないと竹ぼうきや、ぼうをもつしすぎることに熱中した。

- (二) 問題点
- さきに述べたようにカリキュラム作製に意味があるのでなくその効果的な作用、つまり運営の方法に意味がある。實際わたくしたちが運営していく上にいくたの問題点をもつてゐるがその問題をどの角度からきりこんでいくか、そこに大いなる成長と、教育の効果があらわれていくと思う。本園では二ヵ年計画の教育課程作製、運営した結果次のような問題を年次計画で逐次研究していく、子どものよりよい成長をねがっている。
- ① 幼稚園における道徳教育のありかた
  - ② 幼児の言語生活を高める指導技術
  - ③ 集団の中で個人をのばす指導技術
  - ④ 幼児の健康について
- 以上

- ① 季節的配慮 ② 単元活動との関連  
③ 環境（人、物的） ④ 行事  
⑤ 家庭の協力
- 自由遊びは次の両面が考えられると思う。  
 ① 幼児が個々自由意志をもつて遊びを選び抜する場合。  
 ② 自由意志ではあるが幾分教師の働きかけをもつて遊び場合。

# 生活指導について

秋田好枝

## ◎生活指導のもとめるところ

幼稚園教育の目的は、幼児にふさわしい環境を用意して、そこで幼児を生活させ、希望ましい方向に、心身の発達がよりよく促進されるように指導することにある、と教育要領の第一章の中に書かれてあります。が、この中の「生活をさせ」には、豊富な生活経験をさせるための教育計画と、よりよい生活指導がなされなければ、その目的の達成は出来得ないと思します。

ふさわしい環境とは、幼児に適切（使用が安易に出来る）な施設、設備と、幼児数に適当な数ということだと考えます。一つの遊具にも、一つの施設にも、常に、幼児の満足を与えることが出来ているだろうか、幼児数に比例してこれでよいのだろうか、

か、と幼児の状態を眺めながらたびたび考えることですが、例をあげてみると、水道施設で、数が幼児数に比例してたいへん少ない場合「手を洗いましょう」と言えば、長蛇の列で、時間はかかる、待っている間

に喧嘩ははじまる、という状況です。数が幼児数に比例して多ければ、たやすく使用が出来るが、人にゆずるとか、順番を待つという指導は出来ない。これら施設、設備についてこのような例は、園の生活では数えきれないと思います。

適量ということを、まず、幼児の生活の実態から考慮し、一つひとつ施設、設備に対して、この遊具では順番を待って使うとか、この施設は協力して……とか、のよう、生活指導計画をたてた上で、適切な環境を作っていくなければならないと思い

ます。

私は、あちらこちらの立派な幼稚園を参観させていただく機会が多く、ああいい施設だと喜んで見せていただきますが、さて自分の園にはこの施設はどうだろう、と考えさせられる場合がたびたびあります。園児数の相違、園舎の構造、広さ、地域的な差などを考えねばならないと思います。

次に私は、生活指導の基本は、社会生活への適応と、自主、独立の精神を養う（人に迷惑をかけない、自分のことは自分でする自立の習慣）ということにあると思っています。私ども教師は、幼児の特性を知り、一人ひとりの発達状態を把握して、適切な指導をしなければならないと考えます。

さてその指導にあたって、未分化な幼児に対してどのようにすればよいかは、具体的に、その場その場においての指導でなければなりません。朝の自由遊びの出来事を、帰宅準備をして、今日、誰かさんがしたことは、と話すより、その自由遊びのその場での指導の方が、幼児に理解され、善い判断もつくと思います。

また教師は、園でのきまりなどについて、ある幼児は見逃し許す、ある幼児は強制する、というのではなく、すべての幼児に対して、公平に指導しなければなりません。

ある時は許し、ある時は強く、というのでなく、一つのきまりの指導は、あくまでも貫く意志を、教師はもたなければならぬと思います。幼児にくりかえしきりかえし反復させ、それが習慣になるまでに指導してゆかねばならないと思います。

いよいよ、小・中学校において、道徳教育が実施されることになりましたが、幼稚園における道徳教育は、どのようにすればよいかと考えますとき、私は、現在日々おこなっている生活指導により、前にも述べましたように社会生活への適応と、自主、独立の精神を養うこと、これすなわち、道徳教育の芽生えであると思つております。

### ◎私の園の生活指導

私は、幼稚園教育はすべて生活指導である、と言つても過言ではないと思います。私の園では六領域にわたって、生活指導の目標を立て指導をしていますが、次にそ

の中から二、三の領域について具体例をかげてみましょう。

一、健康について  
き、指導に当つている。

#### 二、社会について

中のものは自分で始末する

- きまりよい生活
- 自分のことは自分でする
- 運動具を正しく使う
- 交通規則を守る
- 戸外で元気に遊ぶ
- 便所をじょうずに使う
- 清潔にする
- 具体的例
- 便所をじょうずに使うことについて
- 入園第二日から部屋に入る前、教師が便所に全員を連れて行き、便所下駄にはきかえさせる。正しく便所をする場所を教え、便所以外の場所にしないこと、こぼすと汚ないことなどを知らせる。下駄の履替え、手洗い、ハンカチの使いかたをいちいち指導する。履替えた下駄の乱雑をなくするために、エナメルで、下駄の家を描いておき、下駄の家に、きちんと、揃えて入れるように指導しておく。

- 友だちと仲よく遊ぶ
- きまりを守る
- 遊具の片付けをする
- 人に迷惑をかけない
- 友だちに協力する
- 物を大切にする
- 自分の仕事に責任をもつ
- 自分のことは自分でする
- 友だちが困っているときは手伝つてくれる
- 具体的例
- 自分のことは自分でするについて
- 部屋に入った場合、幼児の固定した場をきめていないので、自分の坐る場所に腰掛がない時、教師はすぐ手を出さず、自分で腰掛を探すように導き、自分で持つて行くようにさせて、幼児に出来るることは、多少時間がかかるべくさせるようにつとめている。

### 三、絵画製作について

◎自分のものは自分で始末する

◎途中でやめない、終りまでする

◎友だちに協力する

◎道具の使用のきまりを守る

◎跡片付けをきれいにする

#### (具体例)

自分のものは自分で始末するについて

道具箱を出して使った時、お仕事がすむと、そのまま遊びに出る幼児が多い。入園当初から、そのまま出て遊んでいる幼児を、部屋まで呼んできて、きちんと始末するようにさせている。

以上、大まかな目標と、二、三の具体例をかかげましたが、全領域にわたって、きまりを守る、自己的ものは自分で始末する、人に迷惑をかけない、友だちに協力をすることでありまして、いわゆる社会生活と自立の面だと思います。また具体例にからげましたように、教師が幼児に対して、あまりにも親切すぎないように、無理にならないときは、幼児に実践させる配慮と、教師が、幼児とともに始めたきまりを実践できなければ、とうてい、指導は出来ない

と思います。

#### ◎家庭の協力

いへん喜ばれることもございました。

◎むすび

次に、幼児の生活指導は、幼稚園で一生懸命指導しただけでは、幼児の身につくまでの指導は出来ないと思います。これには、どうしても家庭の協力なしでは、どうすることも出来ないと思います。私は、入園前保護者会において、幼稚園教育の概要について話し、特に社会性と自立について語り、教師の態度について、自分で出来ることは自分でさせるなどを話して、家庭においても、衣服、脱ぎ着、洗顔、手洗いなどに協力してもらうようによく依頼して、実践してもらいます。入園後、毎月の幼稚園だよりのお母様がたへの欄に、くわしく指導内容を記載しておく。また参観日には、生活状態をよく見ていただき、保育後の懇談会にお

来る環境を作ることに一心であります。運動具も、園庭が狭いために、幼児数に適切な設備が出来ないので、目下遊び道具の数をふやし、幼児が没頭して遊ぶことの出来る環境を作るに一心であります。幼児たちは楽しく遊んでおります。

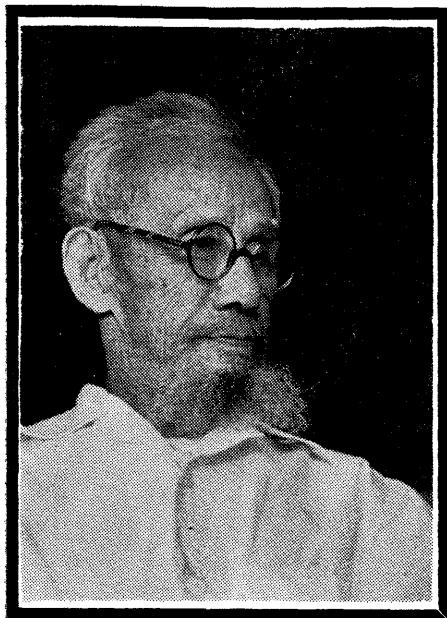
私はまず第一に、幼児の社会性(よりよい対人関係)を培うことに懸念の努力をしております。また家庭環境が非常によく、家庭の協力がたいへんよいので、喜んでいる次第であります。皆様の御指導、御批判を賜りたいと存じます。

て帰り、家族中でこれを実施しているとた

(岡山市立伊島幼稚園)

# 東基吉先生を悼む

日本幼稚園協会



## 東基吉翁のこと

津 守 真

本誌の創刊者である東基吉先生は、本年四月廿日に八十七才の天寿を全うして永眠された。東翁は、「幼児の教育」誌の前身である「婦人と子ども」の創刊者である。本誌は今年で五十七巻になるから、五十七年以前の明治三十四年に、現在のお茶の水女子大学の前身である東京女子高等師範学校の教授として幼稚園批評係の役をつとめておられた東基吉先生が、当時女高師の中に組織されていたフレーベル会の機関誌としてこの雑誌をはじめられたのである。明治四十年頃までの「婦人と子ども」をみると、氏の論文は数多く、ま

た牧羊というベンネームで、あるいは和歌を、あるいは童話、隨筆などを書かれて、当時の幼稚園界に新しい息吹きをいれておられたのを見ることがある。また明治三十六年には「幼稚園保育法」を著された。これは、明治十二年の関信三氏訳「幼稚園記」以後はじめて保育界に大きな影響をもった書物である。そしてそれは、すでに、新教育の理論に立った進歩的な書物である。

その後、氏は明治四十一年に宮城県師範学校長として転任され、以来、栃木、亀山など各地の師範学校長を歴任され、最後に池田の師範学校長を五十三才で退職されて後は、池田市の近辺でいくつもの女子職業学校の設立に尽力されて晩年を過された由である。

さて、私は誠に怠慢で、東先生の御住所がわからぬままに、お目にかかることもしないで過ぎていた。実は「幼児の教育」五十巻第十一号昭和二十六年に、「婦人と子ども」創刊当時のことどもと其の頃の幼稚園の状況について」という題で東先生が一文を書いておられたので、数年前より心がけて知人などにたずねてはいたのであつた。今年の春も関西にゆく機会があつたので、心当たりのかたがたにおたずねしたところ、住所をおしらせいただくとともに、四月二十日に亡くなられたという訃報をうけたのである。ほんの一週間ちがいで、お会いする機会ができなかつたことを本当に残念に思つてゐる。また、日本の幼稚園史の上でも貴重な資料をうかがうことができなかつたことも残念である。雑誌「保育」の一昨年の十一月号

に、東先生の訪問記が掲載されていたことを知つたのもその後のことであつて、誠に私の怠慢さを悔んでいる次第である。

東翁が亡くなつてちょうど一月にあたる日に、池田市にあるお宅を訪問して、今年八十二才になられた老夫人より、いろいろと興味深いお話をうかがうことができたのは幸であった。東くめ夫人は、上野の音楽学校を卒業されてより、東京府立第一高女にて教鞭をとり、基吉氏が幼稚園の仕事をされているときに「幼稚園唱歌」を作詞され、滝廉太郎の作曲で、明治三十四年に出版されたかたである。今もなお歌われている「もういくつねるとお正月」などの歌は、東くめ女史の作詞によるものであるとうかがつた。老夫人は温顔にしつかりとした足どりで迎えて下さつた。今なお、幼児にピアノを教えておられ、小さなお弟子さんがけいこに来られたので、おいまをしたような次第であった。雨のそぼ降るうす寒い五月の日に、旅に疲れた足をひきずつてお訪ねした私は、かえつて力づけられて帰途についた。そして最も近代的なL.P.の機械や、部屋の一隅に備えつけられた立派な拡声機を拝見して、半世紀以上も以前にこの雑誌を創刊された歴史を思い浮かべることはむつかしいようだ。そんな最も進歩的な近代的な姿をこの創刊者のお住いに発見したのである。

次に、氏の若いころより晩年にいたるまでの和歌を集められた、



「月歌集惜る」のころ  
春（昭和三十二年印刷）の中  
に、氏自身のことと、また「婦人」と子ども時代のことなどを記された部分があ  
るので、それを引用させていただき、氏の略歴紹介にかえたい。

明治廿三年和歌山県師範学校へ入学の後、「夫からの私の生活は極めて平調で廿七年同校卒業の後一箇年新宮小学校の訓導奉職、廿八年四月高等師範学校文科へ入学、同三年卒業後直ちに岩手県師範学校主事となり、一年過ぎて東京女子高等師範学校教授として附属幼稚園の批評係を兼ねたが、夫から数年の間は私の活動時代であった。内では当時尚フレーベル主義の保育法を固守する女高師卒業の老姫達を相手に闘い、外では幼稚園不要若くは有害論を強調する人達に対し、或は雑誌に或は講演に幼稚園保育新論を発表して居たが、結局附属幼稚園に持論を発表する機関雑誌の必要を感じたので、附属幼稚園にあつたフレーベル会を利用して其会から「婦人と子供」といふ雑誌を発行

することになり、私自身編輯主任となり、或は訪問記者となつて相当忙がしく、時には鶴鳴を聞いて寝に付くことも度度あった。雑誌編輯の他に保育項目としての童話や唱歌の新作の必要を感じたので西洋各国の童話を翻訳又は翻案したりして「婦人と子供」と、また「母の土産」「子供の樂園」日曜読本の三書を編纂し、次いで「育児日記」「教育教科書及女子用教育学教科書」も著述した。  
かうして私の幼稚園批評係の仕事も大体終了したので明治四十年師範學校長に任官、宮崎、栃木、三重、大阪府池田、宮城の各府県師範學校長を歴任し大正十四年依願免官、其後大阪府池田市に居住し、十三の女子職業學校長として次に阿倍野の大坂女子商業學校の經營に当り、昭和六年京都伏見桃山の報徳會幹事となつて附属報徳學校教員を兼ね、昭和十六年職を辞して今日に至つたのである。

登り来て見おろす花の霞か那

# 日本幼稚園 協会主催 幼児教育講習会

本年も左記の要項によつて講習会を開催いたします。

今年も皆様おおぜいおいで下さいますようお待ちいたしております。

## 第一部 午前の部 九、〇〇一～二、〇〇

〔註 本講習は単位の修得にはなりません〕

期日 昭和三十三年七月二十一日～二十五日

会場 お茶の水女子大学講堂

講師

幼児の発達心理

お茶の水女子大学教授 波多野完治氏  
お茶の水女子大学付属小学校長 坂元彦太郎氏

幼稚園の教育課程

お茶の水女子大学付属幼稚園長 及川み氏

幼児の製作

お茶の水女子大学助教授 太田次郎氏  
お茶の水女子大学助教授 津守真氏

人間の遺伝について

お茶の水女子大学講師 林健造氏

幼児教育の科学的基礎

お茶の水女子大学講師 林健造氏

子どもの造形的発想について

米国マントホリヨーク大学教授 ミス・ベンナー女史

幼稚園の一日

〔註 本講習は単位の修得にはなりません〕

## 第二部 午後の部 一、〇〇一～四、〇〇

期日 昭和三十三年七月二十一日～二十五日

会場 お茶の水女子大学講堂及び体育館

講師

幼児の創造性を培うあそび

お茶の水女子大学教授 戸倉ハル氏

申込所

お茶の水女子大学付属幼稚園内講習会係り（東京都文京区大塚町三五）

申込期限

七月十五日まで（はがきに希望の部を明記してお申込み下さい）

会宿費

第一部三〇〇円 第二部三〇〇円（当日払い込みのこと）

会宿泊

御希望の方は七月十五日までにお申込み下さい、二食つき約六〇〇円にてお世話をいたします。

〔注意〕  
備考

今年も講習会用レコードが沢山できました。例年のように、浅草の「スミ商會」が会場に出張して販売いたすことになつておりますから御利用下さいませ。

〔日程表〕		日	時間	
七・三(月)	坂元講師	付受	9.00	
七・三(火)	太田講師	同上	10.00	
七・三(水)	津守講師	同上	11.00	
七・四(木)	及川講師	ベンナード女史	波多野講師	12.00
七・五(金)	坂元講師	同上	津守講師	1.00
			戸倉講師	2.00
			戸倉講師	3.00
			戸倉講師	4.00

昭和十三年七月

日本幼稚園協会

東京都文京区大塚町三五  
お茶の水女子大学付属幼稚園内

# かる子ちゃん



(四)

## 桜田 佐

鳥のおばあさんは、どんなはねがいいか考えました。そして、「いのものも色のがいいだろう。」

と言つて、小さなもも色のはねをかる子ちゃんに渡しました。  
「これは小さいけれど、よくとべるよ。これをあげよう。このはねをにぎって、ぐるぐるまわしなさい。はねの先を上にむけると、あがっていく。下にむけると、さがる。早くまわすほど、早くとべる。まあ、自分でいろいろやってみるがいい。とばないときは、入れてポケットにおくのだ。どうだ、ちょっとやってみなさい。」

そこで、かる子ちゃんは、そのはねをにぎって、先を上にむけてぐるぐるまわすと、からだがすーっとあがつていきました。とちゅうから、はねの先を下にむけてまわすと、だんだんさがってきます。しづかにまわして、原っぱの草の上に、ふわりとおりました。

「うん、そのちょうどし、そのちょうどし、じょうず、じょうず。では、持つていきなさい。また、用事があつたら、くるがいい。だが、朝早く来なさいよ。わたしはねぼうの子は大きらいだ。」

かる子ちゃんは、鳥のおばあさんにありがとうと言って、はね

をぶりまわし、いそいで帰りました。桜の枝にも、池のまわりにも、小鳥が大ぜいいます。

ピーピーピーピー

チュンチュンチュンチュン

ピーチク ピーチク ピーチク ピーチク

クルクルクルクルクルクル

ポツポツポツボー

ピーグル ピーグル ピーグル

チチチッ チチチッ チチチッ

ケキヨ ケキヨ ケキヨ

にぎやかなこと、にぎやかなこと。

やかましいこと、やかましいこと。

そのうち、すずめやうぐいすがかる子ちゃんをみつけました。

「あれ、かる子ちゃんがとんでいるよ。」

「わあ、すてき。」

「ケキヨ、ケキヨ、かる子ちゃんよかつたね。」

かる子ちゃんは大すきな桜の木のてっぺんにこしかけました。

小鳥たちは、かる子ちゃんが自分たちと同じようになるとべるので、

大喜びです。

「かる子ちゃん、いつしょにあそぼうよ。」

しかし、かる子ちゃんは、早くうちに帰って、おかあさんたちに知らせたいと思いました。

「ちょっと、待っててね。おかあさんに会つてくるから。」

かる子ちゃんは、はねをぐるぐるまわして、木の枝からとびだしました。そして、あいた窓からさつとうちの中にはいりました。ごはんをたべていたおかあさんたちはびっくりしました。

「ああ、おどろいた。だれかと思った。かる子ちゃんか。」

「今日はまことにあつたのね。」

「とべるようになつて、うれしいでしょ。」

かる子ちゃんは、今朝、鳥のおばあさんに会つたことや、しけんをうけたこと、はねをもらったことを話しました。そして、もも色のはねをみんなに見せました。

「なんだ、こんな、ちっちゃなはね?」

「でも、よくとべるのよ。」

かる子ちゃんは、はねをにぎつて、ぶりまわしました。そし

て、すーっと窓から出ました。おかあさんたちが庭に出てみると、かる子ちゃんはもう高くあがっています。

「すてきだなあ、あんな高いところにいる。」

「だいじょうぶかしら、落ちたらたいへんだわ。」

そのうちかる子ちゃんは、すーっとおりてきました。そして、

桜の木のてっぺんに腰をおろしました。

小鳥たちがかる子ちゃんをさそいました。

「かる子ちゃん、は

やく遊ぼうよ。」

かる子ちゃんは、

すずめやつばめやう

ぐいすといっしょに

とびまわりました。

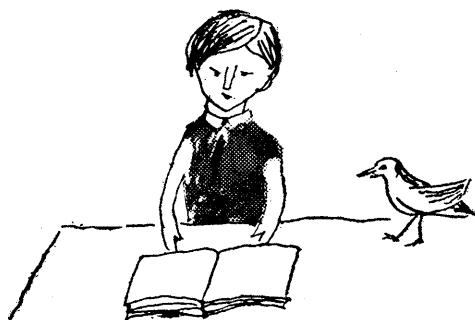
かる子ちゃんは、

ごほんのときやべん

きょうのときやねる

ときは、鳥のおばあ

さんに言われたよう



にはねをポケットにしました。

桜の枝にこしかけても、もうまえのようじっとしてはいません。ほかの鳥ときょうそうをしたり、いつしょに遠くへとんでいたり、たかーくあがつたりしました。かる子ちゃんはとても早く、どんな鳥もかる子ちゃんにはまけてしまいました。

かる子ちゃんは遠くへ行くのが好きです。川のそばへも行きました。海のそばへも行きました。山の中へも行きました。大きな町へも行きました。たかといっしょに富士山のまわりを二回も三回もまわりました。そのうちかる子ちゃんは、もっともっと遠いところへ行きました。だれも行かないところへ行きたくなりました。だれも知らないところへ行きたくなりました。

だれも行かないところって、どこでしょう？ だれも知らないところって、どこでしよう？

かる子ちゃんは朝早くおきて、鳥のおばあさんのうちへそうだんに行きました。

鳥のおばあさんはかる子ちゃんの話をきいていましたが、

「南極や北極はもう大せいの人に行っているし、月や星は学者がいろいろしらべているが、一つだけ、まだだれも行ったことのな

い星、だれも知らない星がある。『子どもの星』という星だ。そこへ行つてみたらどうだろう。」

「それはどう行つたらいいんですか？」

「こゝからは見えないが、月のそばまでとんでいくと、その東のほうに、キラキラ、キラキラ、とてもきれいにひかっている星がある。それが『子どもの星』だ。かわいらしい天使が大せい住んでいる。青々としたしばふの上で、鳥もけものも毎日たのしく暮らしている。美しい花が咲いて、おいしいくだものがいっぱいなつているということだ。ぜひ、行くといい。」

「では、そこへ行きます。」

「ちょっと、お待ち。はねをとりかえてあげよう。」

鳥のおばあさんは、べつのふろしきづつみを持ってきて、中から、まえのはねよりももっと大きな、むらさき色のはねをとりだしました。

「こゝのほうがずっと早くとべる。これなら、地球の外へとびだすこともできる。空氣がなくなるところまるだらうから、このきれをあげよう。これを鼻にあてていれば、けつして息の苦しくなることはない。」

おばあさんはふろしきの中から小さなきれを出して、かる子ちゃんに渡しました。おばあさんはまた、こめつぶぐらいのつぶをたくさん出して、

「これを一つたべれば、一年ぐらいは何もたべなくても、だいじょうぶだ。」

それからまたおばあさんは、すきとおった小さな玉をいくつか出して、

「この中には水がはいつている。一つぶたべれば、一年ぐらいは水を飲まなくともいい。」

と言つて、かる子ちゃんに渡しました。

かる子ちゃんが『子どもの星』へ出かけるということをきいたおかあさんは、とちゅうでかぜをひかないように、外套がいとうをこしらえました。おねえさんは、空氣のきれや、たべもののつぶや、水の玉を入れる袋ふくろを作りました。おにいさんは、遠くのよく見えるぼうえんきょうを貸しました。これも、おねえさんの作った袋ふくろに入れました。

いよいよかる子ちゃんが『子どもの星』へ出かける日がきました。おかあさんとおにいさんとおねえさんは庭に出て、かる子ち

やんを見送りました。

「行つてまいります。」

と、かる子ちゃんが元気に言いました。

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

「人工衛星にぶつからないように。」

「帰つたら『子どもの星』のお話、たくさん

んきかせてね。」

「おみやげ忘れないでね。」

かる子ちゃんが、むらさき色の大きなは

ねをまわしてあがっていくと、たくさん

鳥が、いつしょに、バツととびたちまし

た。とちゅうまで送つていくのです。かる

子ちゃんは、はねをぐるぐるまわしまし

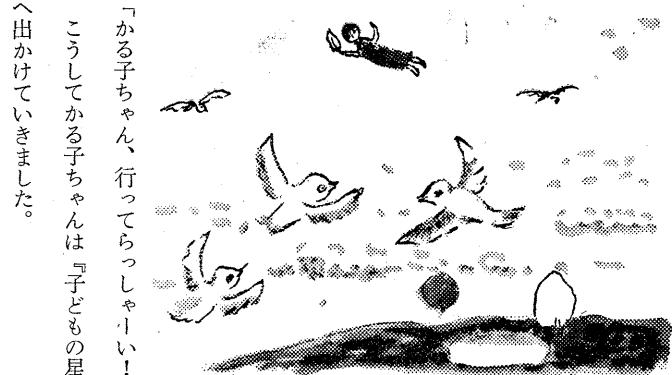
た。かる子ちゃんの早いこと、早いこと。

おかあさんたちには、もう、小さな一つの

点のように見えます。

「行つてらっしゃい。」

「行つてらっしゃい。」



幼児の教育 第五十七巻 第八号

八月号 ◎ 定価 五十円

昭和三十三年七月二十五日印刷

昭和三十三年八月一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼津守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

発売所 振替口座東京一九六四〇番

東京都千代田区神田小川町三ノ一

株式会社 フレーベル館

◎本誌の購読についてのご注文は発売

所フレーベル館にお願いいたします。

(おわり)

教師養成研究会・幼児教育部会編著

# 一 幼児教育叢書

近 日 発 売

## 幼児の社会性指導

（第 4 集）  
A5 価二〇〇円

社会性とはいがなるものであって、幼児にどのように感じとらせ、どのように指導するかをわかり易く解説

幼稚園や保育園における教育を徹底させるためには、  
子どもの両親に幼児教育を徹底させなければならぬ

## 幼児の両親教育

（第 10 集）  
A5 価二〇〇円

幼児の教育課程	A5 ￥180
幼児の心理	A5 ￥180
幼児の健康指導と体育	A5 ￥230
幼児の自然観察	A5 ￥230
幼児の言語指導	A5 ￥190
幼児の音楽リズム	A5 ￥200
幼児の絵画製作	A5 ￥180
幼稚園の経営管理	A5 価二〇〇円

東京都千代田区神田錦町1丁目  
振替 東京 96491

学芸図書株式会社

- 園での幼児の生活にどんな内容を—
- その幼児にどのような指導を—
- これらの問題を、実践面と併せて探  
究する

.....申込先.....

東京都千代田区神田小川町3-1

株式会社 フラーベル館  
A5判 352頁 320円 〒40円

## 改訂 幼児の教育内容と その指導

## 幼児の 劇あそび集

- 幼児教育研究会員が研究、脚本化し  
た24篇の劇あそびを掲載
- お茶の水女子大学付属幼稚園児に実  
施して非常に喜ばれたものばかり

.....申込先.....

東京都文京区大塚町35

お茶の水女子大学  
付属 幼稚園内 幼児教育研究会  
A5判 210頁 250円 〒32円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

# キンダーブック

=第13集 第6編 9月号予告=



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

《9月号内容予告》

らじおと てれび

☆てれびを みましよう

☆うたの おばさん 絵・林 義雄先生

☆てれびの みえるまで 絵・村上松次郎先生

☆よこづな どひょういり 文・小林 純一先生

☆じつきようほうそく 絵・黒崎 義介先生

☆からーてれび 「おやゆびひめ」 絵・小坂 茂先生

☆ほうそう 文・小林 純一先生

☆こっこ 絵・岩崎ちひろ先生

☆おやまの 「ころちゃん」 絵・小林 純一先生

☆ながぐつを 「はいたねこ」 絵と文・富永 秀夫先生

☆おやまの 「ころちゃん」 絵・中尾 彰二先生

☆ながぐつを 「はいたねこ」 絵・宮沢 章二先生

A4判・16頁  
毎月付録付  
定価四十五円

別冊付録「つばめの おうち」  
工作付録「うさぎさん」

東京都千代田区 株式会社 フレーベル館 電話東京(29)7781~5  
神田小川町3の1 振替口座東京 19640番